
盗賊嫌いのチート君

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊嫌いのチート君

【Nコード】

N4302M

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

『橘辰子』こと僕はなんかよく分からない奴に通り魔された。

眼の前には光球が漂っている。どうやらコイツが通り魔の犯人で、その間違ったお詫びにということとで異世界へ。主人公はチート能力を携え、ブラブラと異世界を満喫する。

盗賊嫌いのチート君

僕こと『橘辰子』は学校帰りの途中だったはずなのだが……。

「どこどこだよ!？」

いつの間にか真っ白い空間に、僕はただずんでいた。

見た感じ、僕には身体はあるからたぶん死んでないよね？

「すまんすまん、まさか通り過ぎるだけで死ぬとは思ってなかったんだ。許してほしい」

そこには光の球が漂っており、なんとなくそこから声が聞こえてきた気がする。

第一に感想……。

どこのファンタジーだよ!!

しかし、ファンタジー的な物に生きている間で会えるとはマジ感動。今ならビルから飛び降りてもあまり悔いはなさそうだ。

「いやいや、君死んでるからね」

心読まれた!!

「それぐらい出来るからね。君は今魂が丸裸な訳だし、思っている事全部伝わるから」

マジぱあないっす。

って事は僕死んじやったわけ!?いつどこで、何時何分に!?

「そこら辺も説明してあげるから、まずは落ち着け」

落ち着けるか!!

「まあ、君が死んだのは僕がぶつかったからだよ」

何その理由!!

「決して通り魔じゃないんで、そこんとこ勘違いしないでくれよ?」

何気におちやらける光球に殺意が芽生えた。

「はい!説明終了!そっちから何か聞きたい事ある?」

説明短か!

「じゃ、質問。貴方は何?」

まさか、どこぞみたいな神様とかじゃないよな?

「心で考えて伝えれば良いのに、それじゃ効率悪いよ」

「人間捨てたくないの？」

「ま、良いか。とりあえず君の質問に応えよう」

早くしろ！

「そんな急かさないでくれよ。まず僕は神様では無い。実は神様とはあまり仲が良くないんだな、これが」

神様だったら崇拜してあげたのに。

僕は神様とか大好きだし。例えば某タコとか。

「へえ、趣味が変だね」

うるさいわい！一々心読むな。

「はいはい。で、僕は何者かについてだっけ？」

「そうそう」

コイツの記憶は揮発性か？

「僕は『神祖精霊聖装機』の『融合思念体』だよ」

なにそれ、専門用語使われても分かりません。つか使っな。

「なにそれ？」

とりあえず思っているだけでは解決にならないので疑問をぶつける事にした。

「言っても分からないだろうし、あっちの知識なから更に分からないよ?」

『あっち』って何だよ!

「ま、まさか。異世界とか存在しますか?」

いきなり敬語になる僕。

「ん?あるよ。あたり前でしょ」

実はここまでできて未だ現実思考だった僕に衝撃の真実。

「まさか、本当に異世界があるなんて。調べたくなってきた」

世界の可能性というものに関して、実はかなり好きだったりする。

異世界か……。

自然と笑みが出てしまい、腑抜けた顔になってしまった。

「異世界。行きたいなら行かせてあげるよ?」

「マジっすか!」

子供のように勢いよく跳び上がってしまった。僕は今年で高校2年。突然恥ずかしくなってきた。

出来ることなら救いたい。例えそれが空想でも……。

「ふっふ……。君に人を救えるだけの力と、滅ぼせる力を与えよう。
じゃ行ってらっしゃい」

今僕の夢が叶う。

「行ってきます」

最後ぐらいは笑顔で……。

「必ず助けるから!!」

今ここに決意を胸に僕は飛ぶ。

当たり前前の日常は終焉を向かえ、新たな日常へ僕は足を踏み入れる。

「行ったか……。さて僕は次喚ばれるまでここで寝ていよう……。
お休み……」

第2話

< s i d e 少女 >

汚される、汚れる、汚された、犯される。

そんな絶望の中、私は今周りの人と肩身を寄せ合い、怯えていた。

毎日毎日、薄汚い盗賊共に誰かが連れ出され掃きだめにされていく。

見ているこっちは最高に気分が悪い、毎日マイニチ、誰かが壊されていく。

マイニチマイニチ、皆が怯える。

この中に男は存在せず村の男達は皆殺しにされた。そして村から若い女だけを連れ去っていく。

汚い、キタナイ。

そこら辺から泣き叫ぶ声と、下品な笑い声が聞こえてくる。

私は耐えられず耳を塞いだ。

聞きたくない、キキタクナイ。

すると、盗賊の内の一身の者達が三人ほどこっちに鼻息を荒くしながら、こっちに寄ってくる。

嫌だ嫌だ!!
助けて助けて!!

「頭、もう俺我慢出来ません!」

その言葉に私達は怯え、涙を流していた。

今度は誰、今度は誰が壊される。

壊される壊される壊される壊されるコワサレル。

「クツクツ。お前エロいな。仕方ねえな、適当に一人と遊んで発散してこい」

そう言われると、急々と私達の中から眼を光らせながら選んでいく。

「お前に決めた。来い!」

そう言うと、私に歳が近い子を首輪の鎖を引っ張りながらズリズリと引っ張っていく。

「嫌だ!!嫌だ!!嫌だ!!」

引っ張られながらも抵抗し、泣き叫びながらもそいつへの距離が徐々に近付いていく。

「ああ、良い。最高に健気だ!!」

高笑いをしながら、盗賊は掴んでいる鎖に力を入れた。

「痛い！！痛い！！痛い！！」

そのせいか、その子の首に負担が行きあまりの痛さに膝を着いてしまった。

「ん〜。悪い子にはお仕置きが必要だな。俺が直属に調教してやるから感謝しろよ」

歪んだ顔をしながらも、鎖に更に力を入れその子を引っ張って行く。まるで、犬の散歩のようだ。

「首が痛い！立ちますから、立たせてください！」

あまりにも痛いのか、自ら願ひ申し上げた。

フラフラの足に力を入れ、立ち上がろうとするが……。

「きゃっ！」

途中で体勢を崩してしまい立ち上がれず、また膝が地面に着いた。

「もつめんどくさいからここですか」

ニタニタしながらその子を見下ろした。

「ヒイツ！！」

あまりの恐怖でガタガタ振るえだし、その子は涙目になった。

そんなやり取りをしていると、その近くに居た男が私に近付いて来る。

「なんだがアツチを見てみると、俺もしたくなってきちまいやがったぜ」

そう言うのと私に手を掛け、おもいつきり引き寄せられた。

神様神様どうかお助けください。

「へえ、良い面してんじゃねえか」

その男は私をジロジロと見てくる。私はその嫌らしい視線に吐き気を覚え、今凄く気分が悪い。

「諦めな。こんなところにお前達を助ける奴は居ねえ、せいぜい俺達に媚びでも売って生きてくことしか出来ねえんだよ」

男はそう言うのと私の着ている服に手を掛け、思い切り引きちぎった。

「キャアアアアアア！！！」

絹を裂くような声が響き渡った。

「こりゃそそりるな」

男は舐め回すような視線で私の身体をジロジロと見てくる。

「もう嫌だ……。なんでこんなことするの……」

ポツリと私は独り言を言った。

「誰か助けてください……。どうか神様お願いします……」

どこかに願を届ける。

そして男の汚い手が私に迫る。

「嫌だ……。嫌だよ……。誰か……。誰か助けて……」

その瞬間、私に迫る男の動きが止まった。

ブシャー！！

鮮血。男の身体は腹から綺麗に切断され、身体上半身が地面に落ちた。

「えっ……」

私はあまりの出来事に、呆然となり、ボンヤリしていたが、神様が私を助けてくれたのだと思った。

「この下郎共が！！俺の目が黒い内は貴様らの好きにはさせない！！その行為万死に値する……」

その人は黒髪黒眼と珍しく、両手には剣を構えている。全身には返り血を浴びてもなお、どこか神々しい雰囲気がある。

これは神が遣わした『勇者』様では。

ふと、そんなことを思ってしまった。

でも、これで私達やっと助かったんだ。

すると、その御方は私達に近付き一言。

「遅くなってごめん。君達を助けてあげるから。だから次気が付いた時には幸せに」

そう言われると突然眠気が襲い、私達は寝てしまった。

その眠りにつく前に私は一言言いたかった。

「ありがとう……」

そして私の意識は遠退いた。

第3話

< s i d e 橋 >

目を開けると、そこは薄暗い洞窟の中だった。

「此処が異世界？」

周りを見渡すと、どこかの洞窟のようで声が反射し響く。

「此処が異世界だったら、うるつくだけで襲われるよな。神様いわく、何か能力くれたみたいだけど何だろう？」

ポケットを探ると、何時も学校で使っている手帳が出てきた。

何時もの癖でペンを探すが見つからない。

適当に自分の手帳をペラペラとめくると、手帳の最後辺りに赤い文字で何か書かれていた。デ ノートじゃないよね。

『手帳に書かれている能力ならなんでも使えるからかんばつて』
と書かれていた。

瞬間俺は固まった。

「マジで……。チートじゃん」

実はこの手帳はネタ手帳で、考えついた能力やら必殺技の詳細。さらにキャラクターの設定まで書かれている。

え……。アレですか。妄想具現化？

あの御方も良い仕事しますね。

「まさか、キャラクターの能力も使用可能か？」

試しにイメージしてみる。

突然体が熱くなっていく。

片手を前に突き出し、俺専用の呪文を唱える。

「来い！『ディスプレイケン』！」

突き出した片手には一丁の回転式リボルバーが握られていた。

「あまり重くないな、これなら片手で扱えそうだ」

クルクル回しながら自分の能力を確認した。

「『ディスプレイケン』モード変更。双剣バージョン、セットイン！」

『ディスプレイケン』は光になり、形を変えもう片手に剣が握られていた。

「完璧実用性の無いネタ武器だったんだけど、使えるではないか」

何故『ディスプレイアケン』の実用性があまり無いかと言うと、俺の書いてある設定では修理費がぶっ飛んでいるからだ。理由は、中のコアが希少だからということ、設定を書いたからである。

「『空間移動』……、はやめておこう。ミスったら死にそう。動きは再現出来るか……？」

例え近接武器が優秀でも、元となる俺の動きが悪かったら宝の持ち腐れだよな。

「イメージ通りの動きで試してみるか」

まずは、超高速の前進移動。

スッ……。

で、出来ました！

スッスッスッ

連続で試してみると中々良い。

「これなら動きを再現できそうだ」

目指すは、俺の手帳にあるネタキャラクターの動き。

「能力も確認したことだし、此処から出よう」

動こうとしようとすると、遠くから女性の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

「急ぐ！」

俺は声が聞こえた方へ向けて、全力で走り出した。

徐々にに声が大きくなっていく。それにしたがって変な臭いが鼻につく。

……ふざけるな……。

更に声は大きくなり、男の声も聞こえるようになってきた。

……フザケルナ……。

叫び声、喘ぎ声、笑い声。どれをとっても不快にしかならない。

前には、今にも少女に襲い掛かろうとしている男がいる。

……フザケルナ……。

無意識に『ディスプレイ』を強く握りしめていた。

「誰か助けて……！」

ええ、助けます。

横に一閃。

嫌な感触が剣を伝って腕にくる。

そして、鮮血を吹きながら上半身と下半身が別れ、上半身は地面に落ちた。

躊躇はしなかった。人生初めての人殺しだったが、特に何も感じなかった。

「え……」

少女はかなり刺激的だったか、呆然としている

こんな歳端もいかない女の子を……。久し振りに切れた、コイツら殺すか……。

周りを見渡すと、鎖に繋がれている女性の方々が、布一枚で床に転がされていたのが見えた。

コイツら……！！

「この下郎共が！！俺の目が黒い内は貴様らの好きにはさせない！！その行為万死に値する！！」

見た限り、後、最低、目の前に二人の男と、腕を後ろに回され拘束されている少女がいる。

その二人は、丸腰だったためか即座に逃げだした。

それを確認し、俺の近くにいる怯えている少女に近付いた。

「遅くなってごめん。君達を助けてあげるから。だから次気が付いた時には幸せに」

そう言うと少女は安心したのか、一言だけ言っただけで意識を失った。

「ありがとう……」

ありがとうか……。

俺の自己満足だからな、あまり感謝される謂れはないのだが……。嫌な感じではないな。

それよりも、さっきまで拘束されていた少女の方も気になるな。

俺は、さっきまで二人の男に拘束されていた少女へ、駆け寄った。

「大丈夫……」

少女に言いかけた瞬間。

「嫌ああああアアア！！！」

少女は俺の顔を見るなり、突然泣き叫んだ。

「来ないで来ないで来ないで来ないで！！痛い嫌だ！！痛い嫌だよ！！！！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だいやだ！！！！」

その少女は、泣き叫びながらも俺から距離を取ろうと、体を

だから安心して……、安心して良いんだ……！だからね……」

俺は、少女をあやしなながらも落ち着かせようと頑張った。

「ああアア……」

少女は、しばらくすると暴れなくなり、俺の胸に顔を埋めた。

「よしよし……。大丈夫大丈夫……」

少女の背を摩りあやしていると、少女は緊張の糸が切れたのか俺の胸の中で寝息を発っていた。

「さて……。逃げて行った奴らどこに行ったんだ……？」

すると、幾つもの足音が聞こえてきた。

「数を揃えて来たか……。まあ良い……。御礼はしっかりとしないとな……。」

すると入口あたりからゾロゾロと、あの逃げた奴らの仲間だろうが現れた。

片手には武器を持ち、目をキラキラと輝かせながら俺の方に注目している。

「てめえ、どこのどいつだ!？」

その内の一人が俺に聞く。

俺はそれを無視し、少女の身体を地面に預け、眼を細めながらそいつらの方を向いた。

「気味わりい、やっちまえ!!」

そう言うと、何人かがこっちに走り出し剣を振りかざした。

俺はそれを全て素手で受け止め、蹴り飛ばした。

「我が断章此処に至りて、罪悪為すもの我は処する。さあ……、断罪してやろう。外道が」

俺の不気味な雰囲気は何人かが腰を抜かしているが、それは一瞬。頭首により激が飛び。

「一斉にかかれ!!」

一斉にかかった。

俺は落ち着いた物腰で。

「誰一人逃がさん……」

そして戦いは始まった。

第4話

「『デイスファケン』 双剣モードセット！」

身体から光が溢れだし、手には『デイスファケン』 双剣モードが納まった。

「継いでいく！我が世界、偽終焉を写し取れ！！《ワールドフェイク》！！！」

対象を閉じ込め、対象を弾く、俺だけの処刑場の出来上がり。

この世界に在るのは俺とコイツらのみ。

しかし、ぶつつけ本番で成功するとは、手帳の能力は恐ろしい。

「叫びも上げず逃げ！！！」

後は俺の一方的な残虐が行われ、塵ひとつ残さず消滅させた。そして『世界』は消え元に戻った。

「しかし、現代人としてはかなり熱血だったな、僕、引きこもりなのに此処に来てから、良い具合に頭が可笑しくなってきたな……。これもあの御方に会ったからかな……」

さっきはどうも勝手に一人称が『僕』から『俺』に変わっていた。たぶんそれは、僕の知っている強い人のイメージの一人称が、『俺』

だから僕の一人称『僕』が勝手に変換されたんだと思う。
もうその事を知ってしまったから、戦闘中勝手に一人称は変更され
ないと思う。

それよりも。

さて、どうしたもんか……。

ここがどこの洞窟か僕は分からない。

捕まった彼女達を元の場所にどうやって戻すべきか……。

そもそも、帰すにしたってもう壊滅してそんな気がする。

今更だが後悔し始めてきた。

あの盗賊達（？）の中から一人ぐらい残すべきだった。

ふつつつと後悔の念が。

マジどうしよう……。。

とりあえず、彼女達を縛っている鎖を全部外しておくか。

パァン！！

全ての鎖は断ち切られ、彼女達は自由になった。

「これでよし！」

一人ガッツポーズを決めていると、鎖にさつきまで綱がっていた内の一人が、決心を決めこちらへ歩み寄って来た。

「盗賊共から私達をお救いなさり皆の者も含め感謝します」

その娘は頭を下げた。

ボロボロの服を着て身嗜みも調っていないが、10人の内10人が美女と言うぐらいの美少女だった。

瞳はエメラルド色、髪は海のような蒼さ。

やはりなのか、閉じ込められていて髪本来の輝きを失っており、頬が少しこけている。

「あ、どうもどうも」

しかし美少女、実は僕、美少女に対してどうしても拳動不審になつてしまい、リアルで会話らしき会話をしたことが無い。

そもそも今日の前に居る少女は、リアルでは見たこと無いほど可愛いのだ。

拳動不審を超え、足がガタガタ震え始めてきた。

僕の脚よ止まれ！！

結果止まりませんでした。

無性に泣きたくなってきた……。

「大丈夫ですか？」

僕を心配してくれるのか、少女は僕に声を掛けた。

「ハア……ハア……。大丈夫です。だから心配しないでください」

動悸息切れが激しい。さっきの戦闘では堂々としていたけど、自分の今居る立場を認識し直すと、吐き気と目眩もしてきた。

まさに美女に囲まれる男の構図。

普通の男なら、ヒヤッホイ！とか叫んで喜びそうだが、僕は違う。今全員の視線がこっちを向いている。

鼓動が激しい……。ここに居たら寿命がマッハでなくなりそうだ。

ハッキリ言っ……。女性に対しての免疫の無い僕にとって拷問に近いです……。

「貴方の名前を伺っても良いですか？」

透き通る声が響く。耳から全身に駆け、そして……。

「ガハッ……！」

第5話

今夢を見ている。

僕の世界にいる親友が突然現れ、何か言いはじめた。

「実は俺……。木耳って小学校の給食に出てから、ずっとクラゲの仲間だと思ってたんだぜ……。キノコの仲間と知った時の俺の悲しみが分かるか？笑っちゃうよな？鬱だ死のう……」

それだけ言うと、姿を消し、僕は夢から覚めた。

「知らない天井だ……。そしてどうでもいい」

「目が覚めましたか」

メイドらしき人が居た。

「いったい僕が気絶している間に何があったんだが……。ハァ……。ついつい溜息を漏らしてしまった。」

「私はこのメイドをやっている、メイヤと申します」

スカートの端をつま先で掴み、上品にお辞儀した。

リアルメイドですか……。

「僕の名前は、ん〜どうしよう、本名を名乗るべきか、また別の名前を名乗るかべきか。メイヤさんどっちが良いと思いますか？」

「私のことはメイヤと呼び捨てで結構です。名前に関しては、御都合が悪くないのでしたら本名を名乗るべきだと思います」

「僕の名前は @ ! ! !」

普通は発音出来ないような奇妙さで言った。

メイドさんは眉を潜ませ、困ったような顔をしている。

わざわざ発音出来ないようにしたのだから、面白いリアクション頼みます。

「すみません、もう一度お願いします……」

「 @ ! ! !」

「すみません、私が勉強不足のあまり、貴方様の名前を発音することが出来ません。……すみません……」

メイヤさんは落ち込み、目を伏せてしまっている。

「ぶっ！ー！ごめんごめん、さっきのは冗談。僕の名前は橘辰子って言うんだ。よろしくメイヤさん」

「からかわないでくださいタチバナ様」

メイヤさんは少しむくれ面になりながらも僕に言った。

「後僕のごことは様づけじゃなくても良いから。いやホント、偉いことかしてないから！！平民だから！！一般ピーポーだから！！だから様付けはやめてください！！」

様付けは本格的にやめてもらいたい。相手を様呼びするのは好きなんだけど、自分に言われると背中が痒くなってくる。ついでに悶える。

ディスプレイ越しから聞くならまだ大丈夫だけど、リアルで聞くにはちょっと免疫力が足りない。

「なら大丈夫ですよ。タチバナ様はこの国の姫を盗賊共の魔の手から救ったんですから、もう国中では『勇者』扱いです。ですから偉いんですよ」

『勇者』?!

「え！いつの間に僕勇者になったの！国とか世界とか魔王の魔の手からとか救ってないよ！！勘違いなのか！勘違いなんだな！殺される〜！処刑だ〜！」

頭がトリップして、フラフラと身体が動く。

「落ち着いてください。まだ正式に決まった訳ではありませんので、そこまで混乱しないでください」

とりあえず落ち着こう……。何故こうなったのか聞かなければ！

「簡潔に説明プリーズ！」

「ですからさつきおっしやったとおり、夕チバナ様が俗共から姫様を助け出したんですよ。まさに勇者様の様だったと他の者にも聞きました。」

「へえ、でも僕のただの自己満足だし、勇者って崇められるほど果敢じゃないよ。それと姫様って蒼髪の娘？」

まさかな……。

「あ、はい。『クレセント』第一位継承者のルーミア・クレセン・S・トリプル様です」

メイヤさんが目茶苦茶良い笑顔してくるのですが。

「色々言いたいことあるけど……。逃げて良いですか（涙目）」

まさかまさかのテンプレ。まさか、助け出した人が王族とか泣いちゃうぞ。後処理大変だし、周りから暗殺されそうだし……。良いこと全然ないじゃんか。

あでも、歓迎されて美味しい料理が食べられるかもしれない。

中に毒物が混入してたらどうしよう……。

それからメイヤさんがさつきからこつちを目茶苦茶良い笑顔で見てくるのだが……。嫌な予感がする……。

「駄目ですよ。さつき周りの者達に夕チバナ様が目覚めたと姫様に伝えるよう言いましたから。姫様は吐血して倒れた夕チバナ様のこ

とを心配してましたよ」

「あ、そうだそうだ。僕……吐血して倒れてたはずんだけど、誰がここまで運んでくれたの？」

触れられて吐血ってなんかシユールだ。

「姫様が運んでくださいました。あの時は私も驚きました。まさか行方不明の姫様が、見ず知らずの方をここまで運ぶなんて」

一瞬姫様が片手で僕を担ぐ姿を想像してしまった。

なんと言っか……。イメージが……。

「じゃ、お姫様に、「ありがとうございます」とでも伝えておいて。そして僕は飛ぶ!!」

飛び立とうと、窓に足を掛けた。

ギユウ……。

背中に何か暖かい物が……。

「駄目です!! 姫様が来るまで待っててください! タチバナ様は恩を阿多で返す人なんですか! 本当に姫様は貴方に感謝してるんですよ! だから、もうちょっともうちょっとだけ待ってはいただけないでしょうか!」

振り返るとそこには、僕を止める為に身体を張ったメイヤさんがいた。

というか、抱き着いてきてます。背中にある感触が……。

駄目無理……。

「ガハツ!!」

本日二度目の吐血をした。

「タチバナ様大丈夫ですか!! ああ〜どうしましょ! 今すぐ医者連れて参ります! だからタチバナ様死なないでください!」

だから触れないで……。マジ死ぬ……。

「僕は大丈夫だから、あまり揺すらないで……」

意識が朦朧となる。最後に見たのは涙目のメイヤさんの姿だった。

こんな良い人なのに泣かせるなんて……。ほんと最悪だな……。僕は……。

そして、意識が堕ちた。

「ここは？」

起きると、僕が寝ていたのはやたら豪華なベッドだと分かったか。

「おめ覚めになりましたか……。気分はどうですか？」

蒼色の髪、緑の瞳。歳は僕と同じ17ぐらい。ルーミア・クレセン・S・トリプル。僕が助け出した内の一人。まさかお姫様だとは思ってなかったんだけどね。

しかし、何故に僕は今お姫様と一緒に居るのでしょうか。

そんな状況に僕は『混乱』している。

「姫様。ここは、どこでしょう？」

相手が相手だ、最低限敬語ぐらいは使うべきだろう。

「私の事はルーミアとでも呼んでください。タチバナ様は私の命の恩人なんですから、敬語じゃなくとも良いですよ。私達を助け出してくださいましたのですから、なんの遠慮もいりませんよ」

なんともフレンドリーな、お姫様様だ……。こういったフレンドリーな人って、民衆に愛されそうだ。

「最低限のケジメはつけます故、姫様が気になさる必要はありませんが、一つだけ聞きたいことがあります」

姫様は少し不機嫌な顔をした。

「でしたら、私の事をルーミアと呼んで敬語も外してください」
なんつう条件だよ……。

「はあ……。分かった分かった。ルーミアと呼べば良いの？」

「はい！」

少しはにかんだ顔でルーミアは言った。

機嫌が戻って良かったよ。

「で？あの娘達は？」

「あの者達でしたら騎士団の者達が今故郷に帰してますよ。あの娘達は「ありがとうございます」と言っていましたよ」「

「そりゃ良かった」

少し腰を落ち着かせた。

「なあ、ルーミア。その騎士団って全員男か？」

「様聞いておく。」

「え？いえ、女性の方々も居ますよ。それがどうかしましたか？」

「フツフツ……。気にしなくても良いよ、あまり意味は無いから」

ルーミアは、いかにもクエスチョンマークが出そつだ。

「それよりも、お身体の方は大丈夫ですか？」

そついえば吐血してから記憶無いや……。

「身体の方はもう大丈夫。つか、あれは僕の精神の脆さが招いたことだから。あまり気にしないでね」

そう言つてルーミアの頭を撫でた。

「／／／／／／／／」

え？なんですか？無意識ですよ？

橘辰子は『なでぼ』を覚えた。

橘辰子は状態異常『悶え』になった。ついでに吐血しそうだ。

BBBBBBBBBBBB……。

状態異常『悶え』はキャンセルされました。

「ああ……、そついえば、メイヤさんはどうしたの？お礼言いたいんだけど」

メイヤさんの話を持ち出すと、突然ルーミアの機嫌が悪くなった。

……何故に……。

「あの者なら、今外で待機してます。呼びましようか？」

「いや、別に良いよ。ただ「助かった」と伝えたかったただけだし。ルーミア伝言頼める？」

あまりね……。だって、メイヤさんの顔を見たらまたあの感触思い出しそうだしね。

「はい！」

何故か姫様は笑顔で返事するし。

まあ、あまり難しく考えると頭痛くなるし、気付かない方が良くともあるでしょ。

第6話？

今夢を見ていた。

夢の中には阿保の知り合いが居た。

「俺たまに、現実と空想が混じり合ったりするんだよな……」

病院行ってこい。そしてしばし消えてろ。

「朝起きる時にあまりの眠さに脳が拒否して、目の前にセーブポイントが見えてくるんだよな……。不思議不思議」

お前の頭がもう不思議だ。だから一度素直に精神科行ってこい。

「で、頭の中ではセーブしたんだが……。あれだ、あまりの眠さに頭の思考が落っこちてたんだ」

「現実にセーブポイントなくね、ロード出来ないじゃん」

あたりまえだ！！

「だから言っただろ、俺の頭が拒否って一瞬空想を現実と誤認したんだよ。で、頭がしっかり覚めてくると」

「大丈夫か俺……？」

うん！駄目駄目、セーブポイントが見える辺りからヤバイから。

「だから俺決めたんだ」

何を？

「セーブはこまめにしよう」と

何がしたいんだ親友。

「しかし、ファ コン世代の者達には、セーブデータの死のカウントダウンが、刻々と近づいてきている」

「冒険の章が消えました。鬱だ死のう」

そう阿保が言うと、世界が目が開けられなくなるほど真っ白に染まる。

出来れば……もう出てこなくてくれると嬉しい。

る耐える耐える)

なんつつか、某シ ジ君の逃げちゃ駄目だの別バージョン？

まあ、さすがに恩人の目の前で吐血とか、失礼にもほどがあるだろう。

僕は必死に身体から競り上がるなにかを必死に押さえ込んだ。

「ありがとう、行こっか！」

頭のネジが緩んで、何故かナイススマイルになってしまった。

「／／／／／／／／／／」
顔を見るとルーミアの顔が赤かった。

ふと自分の手を見ると、つついルーミアの手を強く握り返していたようだ。

「ごめん！痛かった……？」

ルーミアから手を僕は離して、聞いた。

「あ………」

ルーミアは名残惜しそうな顔であった。

「いや、そんな名残惜しそうな顔しないで」

「／／／／／／／／／／」

そう僕が言うと、ルーミアはまた赤くなった。

……血行良いね……。

そのルーミアの様子を見て、実に阿保な考えをした。

「いえ、別にタチバナ様の手が温かくて落ち着くとか、名残惜しいとかそんなこと考えてませんから!!」

それは意味の無い弁明だよ……ルーミア。

ぐうぐ。

本日二度目の空腹音。

「……とりあえず何か食べよう。空腹感がやばい……話はそれからだ」

「……そうですね……行きましようか」

廊下に出るとすぐ近くにメイヤさんが居た。

僕とメイヤさんの目が合った。それに対し何故が満面の笑みをして即座に退散していった。

……何がしたいんだあの人……。

「タチバナ様？」

少しメイヤさんの奇怪の行動に呆然としてしまったので、ルーミアに心配された様だ。

「ねえ、ルーミア。此処のメイドは顔を合わせると、笑顔で退散していく奇怪な行動とるの？」

「え……？」

ルーミアは意味がよく理解出来てないのか、フリーズしてしまった。

「あ、ごめん。さっかのごことは気にしないで。ちょっと聞いてみたかっただけだから」

さすがにこのままフリーズして、立ち止まっているのは迷惑だと判断、すぐさまルーミアの再起動に移った。

「すみません。主である私がメイドの行動を把握していないなんて……」

僕の言葉に少し落ち込んだ様で表情が暗い。

ポン……。

何故か無意識に手がルーミアの頭に移動。そして撫でた。

何故……動いた……。

「……………」

ルーミアは赤くなってるし、ついでに湯気が出てるよ……。

……どうしよう……。『

優しく抱けば良いと思うよ』

突然頭に、夢に出て来たアホがそう僕に囁いたかのような錯覚に捕われた。

どこまで邪魔をする。アホの親友めが……。

内心毒づいた。

しかし、そんなことを知らないルーミア。何故か知らないが、目を細めて気持ち良くしている。

僕の手からは、マイナスイオンか何かが出てるのか？

ふと、そんなふうに疑問に思った。

だってね……、僕は前の世界の時モテなかったし、顔も良くなかったと自覚していた。そんな僕がこの世界でモテるとは考えられない。

まったく、誰だろうね。こんな風に世界を『仕組む』なんて……。

そうだ、僕にこの娘が好意を持つはずはない。だってねえ……

『……僕は孤独しかないから……』

そう思うと、突然バニクツていた思考が落ち着き始めてきた。

『思考変換』

これは、僕が捉える常識を別に捉える。僕専用の技法である。つますぎる話をマイナス思考で変換、のち再構築。

別名『現実逃避』とも言える。

プラス思考ではなく、マイナス思考だが……。

まあ、言えることがあるとすれば、現実を受け入れられないただ精神の弱い餓鬼ってことかな……僕は……。

だから逃げる。現実から。

つますぎる話なんて有りはしない。

だって世界はこんなに『歪びつ』だから……。

とりあえずお腹減った。

別に腹ぺこ王子とかでは決していない！

それよりも、ルーミアを元に戻して、食堂に行かなければ！

さつきと違って、身体（精神的にだが）が軽くなってきた気がする。

今なら吐血もしないだろ。

意を決してルーミアの頭から手を離し、手を繋いだ。

「あ……………」

頭から手を離れた時は名残惜しそうにしていたが、すぐさま手を握ると、とても嬉しそうな笑みをして擦り寄って来た。

ルーミアの手は柔らかく、マッシュルームみたいにぷよぷよ、握れば感じるルーミアの手は弾力性もあり、とても温かい。

今まさに、人の温もりを心地良く感じている。

本当久しぶりだ……………。…………。人の手に触れるのは…………。

「じゃ、行こっか！」

食堂にレッツゴー！

「…………はい／＼」

もじもじしながらも、赤い顔で返事をした。

コメント

食堂行くまでが長すぎる！主人公よく餓死しなかったなと感心した。

第8話

ガツガツガツガツガツガツガツ……。

「ウマー……！」

僕は現在、テーブルのに運ばれて来た食事をウマウマと食べていた。さすがはファンタジー、漫画肉をリアルで見ることが出来るなんてかなり感動した。今僕の夢が一つ叶った瞬間である。

「そんなに焦らなくても食事は逃げませんよ」

ルーミアはニコニコ笑顔で目の前の食事には手をつけず、僕の食べっぷりを観察していた。

……なんだか嬉しそうだねルーミア。

実はこの場には、僕とルーミアしか居ないときたもんだ。他の人達は、なんか恐縮しちゃって食事を作ったら出て行ってしまったのだ。

その時、なんかルーミアの目が鋭かった気がする。

あまり考えるのは僕のスタイルではないので、すぐさま思考停止させた。

今は目の前のコイツらを片付けなければ。

ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ……。

食べている間も、ずっとルーミアはニコニコ笑顔を崩さず、僕の食べっぷりを観察していた。

「じっさんでした」

食べ終わると僕は席を立った。

「では、今から実に嫌ですが凄く嫌ですが当たり前のように嫌ですが、王の所に向かいます」

どんだけ嫌いなんだよ父親。

「ほう、貴様がわしの娘を俗共から救出したという自称『勇者』か……」

今現在、ルーミアに連れられて来たところに王様がいる。

ルーミアは僕から少し離れた所に移動した。

ついでにさっきの言葉は王様が言ったものである。

周りには王様を守る為、護衛騎士達がいっぱいいます。騎士達はさつきから僕を睨んできては、ビシバシと殺気をこっちに向けて放っている。

そこまで警戒するなら王様に会わせるなよ……。

「いや、別に勇者じゃないし、そもそも自称すらしてない。勝手にそっちがそう呼んでるだけだろ」

少しいらついたので少し刺のある言い方をした。

例えば相手が、一国を治める王様だろうが態度が悪かったり、相手に不快感を与える言動するなら、僕は表情を隠さず嫌な顔をする。

「まあ、いいだろう。して貴様は何故危険を省みず我が子ルーミアを俗共から助けた？」

それに対し僕は敬語でこう返した。

「理由なんてありませんよ、僕のただの自己満足。俗共に捕まっていたから助けた。理由なんてありませんよ。別に今すぐここから出ていけと言つなら、僕はすぐに出て行きますよ」

僕は少し目を閉じ深呼吸して言った。

「あの娘達を助けたかった。そんな理由ではいけませんか……王様？」

そう僕は王様に問いかけた。

そしてしばしの沈黙。

「クツ！ハツハツハツハツ！！！気に入ったぞ勇者！！我輩娘が気に入ってたからどんな男かと思って招いたが……。実に貴様は面白い」

王様の突然の笑いに僕と王様を除く人達は呆然となってしまうていた。

「橘辰子です……」

「なに……？」

「貴様とか勇者とか止めてください。こっちはタツシタチバナですが、タチバナと呼んでもらえると助かります」

「クツクツクツ……。いいだろう、特別にタチバナと呼んでやろう。わしの名はガリア・クレセン・S・トリプル。ガリア。ガリアと呼ぶがいいタチバナ」

「王様！！」

その中、騎士達の内の一人が王様の前までやってきた。

「騒々しい、なんだ騎士団長プラム」

その人は騎士団長でプラムという名前らしい。

「王様、俺とコイツを戦わせてください。実力もよく分からない身

元不明の男が、王様の名前を呼ぶのに相応しいか、戦って実力を測ってからでも遅くないはずです。タチバナ殿はそれでいいな？」

プラムは僕の方を挑発的な視線で見してきた。

しかし、めんどくさがりの僕にはそんな高貴なプライドなど無く、断るといふ選択肢しか頭に出てこない。

「こと」

「良いですよ受けてたちます！」

断ります。

と言いたかったのに、ルーミアの言葉によって僕の言葉が遮られた。

「だから……」

「姫様ではなく、タチバナ殿に聞いたのだが……。まあいいだろう、勝負だタチバナ殿！」

また、遮られた。

「だから……」

「頑張ってくださいタチバナ様！」

ルーミアのせいでまたまた、遮られた。

なんか言っても、また遮られそうだから戦っただけ戦って負けるか。

正直面倒臭いです。

「相手が気絶するか、降参したら終了だ。勝負は一本。本気で掛かって来いタチバナ殿！」

流石は騎士団長をしているだけあって隙が無い。

プラムはグレートソードを上段で構え、一撃必殺を狙うという戦術なのだろう。

しかし、真剣？

危ないと思うのは僕だけか？

そして、僕は手ぶら。何か渡してくれると思ったのだが……未だにその気配が無い。

まさか、手ぶらで戦えとでもいうのか！酷くない？鬼畜じゃない？人間としての優しを、この人達持ち合わせてないでしょ！

「では、開始だ！」

王様も乗り気の様で、笑っているのがもろ分かる。

「クレセント王国騎士団団長プラム参る！」

そう言うと、プラムはこちらに向かって走り出した。

肝心な僕はというと、現在手元に武器は無く手ぶらの状態だ。あれか、此処は人に武器も与えず戦わせるのが当たり前なのか？それとも己の肉体が最強の武器だともいえるのですか。ここはドラゴン ールの世界じゃないんだぞ！

そんなことを考えている内に、プラムは僕の一步手前の所まで迫っていた。

「《強化》」

周りには聞こえない程度に声の音量を下げ、自分の身体に強化魔法を掛けた。

初めての肉体系魔法を使っただけあって中々に新鮮な感覚だった。

「ハッ！！」

「これが伝説、真剣白刃取り！」

容赦ない一撃をぎりぎりの所で受け止め、グレートソードを素手で叩き折った。

「くくくく！なっ！！！！」「」「」「」

プラムと周りの騎士達は、なにコイツ化け物、と言いたげな顔をしていた。

「これでもまだやりますか？」

少しチート者との実力差を思い知らせるため、僕は余裕だと相手に認識させたかった。
だが、しかし、剣が折れて戦えないと慢心していた僕がいけなかった。

「……《ファイヤーボール》！」

プラムの掌平に出来たファイヤーボールは、至近距離で構成され、そして撃たれた。

「《バリア》！」

間一髪の所でファイヤーボールを防ぎ、人外スピードでプラムの背後をとった。

「《気功》！」

少し自分の気を消費させ、拳に力を集中させて背骨辺りを少し小突いた。

「へぶらばし！ー！」

奇怪な叫びと共にプラムは柱の方へ吹き飛び、柱が陥没した。

「うそ〜ん！」

流石は気功と褒めてやりたかったが、ここまで吹き飛ぶとは思ってなかったぞ。

あ、そういえば強化を掛けたまんまだっただっけ？え、ヤバ、ミ

スった！

明らかな過剰強化に、僕自身もやり過ぎたと後悔し、その受けた相手に対し同情した。

「舐めるな！！」

血をダラダラと流しながらも果敢に突っ込んで来る姿は、まさに勇敢。

「《バーニング・ソード》！！」

プラムの手には、剣の様な形をした炎の塊が握られていた。

……熱くないのだろうか……。

僕はそんな事を考えていた。

「はっ！！」

プラムが切り掛かる。

しかし、それをギリギリの所で回避。

「舐めるなよオッ！！」

プラムはバーニング・ソードを一閃。さらなる追撃を続けた。

「サマーソルト！！」

追撃の際について、バーニング・ソードをサマーソルトにより高々

と蹴り上げた。

「非殺傷モード……《第三闘特技》！」

気功入りの拳で殴る。一瞬だけデイスファケンを出してすかさずに斬る。そして用意していた術式を至近距離で発動、僕の背後よりあらゆる武器が投擲される。

回避不能の弾幕が、あらゆる角度より射出される。

オーバキル当然の攻撃がプラムの身体をえぐる。

訳ではなく、非殺傷になっているので、外傷ダメージよりも精神ダメージの方が優先されている。

つまり、身体に傷は付かないが、精神力がげしげしと削られていることだろう。

まあ、しかし、精神力を全部削るつもりはないわけで、半殺し程度にするつもりだ。

その光景に、王様もルーミアも騎士達も呆然と眺めているだけで、たいしてなにも言わない。

そもそも最初は負けるつもりだったのだが、戦っている内に自分の力を試したいという欲望に負け、圧倒的な力でプラムに勝負を挑んだ。

とりあえず、これ以上はプラムが可哀相なので弾幕を止めた。

「はあ……はあ……。何故俺にとどめを刺さなかった……」

意識が朦朧なのだろう、息キリキリの状態でよく喋れると感心した。

「いや、これ殺し合いじゃないし、相手の命奪う必要ないでしょ？」
さも当然のように僕は言った。

「フツ……。俺は殺す気でやったのだから……。まさか遊ばれるとは思わなかったぞ……。流石は……」

プラムは最後まで、言い切る間もなく意識を失った。

「いやいや、僕は理想の為にただ力を貸してもらっているだけで、貴方の様な努力家ではありません。プラムは僕よりも遥かに優秀……。ほんと……比べ物にならないほどにね……」

気絶しているプラムに対してそう言った。

僕がプラムから離れると、僕達の戦いを見守っていた騎士達が気絶しているプラムを運んで行く光景が見れた。

パチパチパチパチ……。

乾いてる拍手の音がする方を見ると、王様が何故か凄い満面の笑みを浮かべていた。

……恐いです王様……。

そして、さっきまでぶっきょう面から一辺、ただ不気味にしか感じられない。

「クククツ……。強いな夕チバナ……。まあ、わしもこれで隠居出来るから良いんだがな」

引率？引率って王様って何から引率するんだよ。
と疑問に思うのだが、……。まさかな……。

……さつきから嫌な予感しかしない……。

「これからわしの娘を頼むぞ『勇者』夕チバナ」

瞬間僕の何かが壊れた気がした。

そして……。

「嫌だあああああッ！！！！勇者だけにはなりたくない！！！！」

盛大に吠えた。

なにこの死亡フラグ……。

第9話

「すみません、親が不治の病に！今すぐ帰らなきゃいけないで、お願いしますそこをどいてください！」

退路の先には、いつの間にやら騎士さん達が移動しており、僕の邪魔をする。

「クククツ……。そんな即席で作り上げた冗談が、わしに通じる訳なかる。今時そんなこと言うやつはいない。それに安心しろ『勇者』。将来安泰だぞ、それにわしの娘のどこに不服がある？」

王様の娘さんには不服というか……。釣り合わないというか……。僕みたいな駄目人間よか、もっといい人見つけた方が良くと思うんだ。

王様の言葉にルーミアは顔が赤くなっていた。

それよか……。

「『勇者』やめてください。なんですかその若干死亡フラグは。僕にはちゃんとした『苗字』があるんですから、そっちの方で呼んでください。でないと言すら聞きません」

苗字にこだわるには色々理由がある。

『辰子』これが僕の名前だ。

『タツシ』がしっかりした読み方で、『タツコ』と呼ばれる時もあった。それは半ば同級生からの嫌がられとして定着していた。

僕はそれが凄く嫌いだった。

だから、名前より苗字で呼ばれる方が気楽で好きだった。

ま、それはさておき。

「『苗字』ってなんだ？」

文化の違いがあるから、こうなる事も予想してなくもなかったけど、やはり異世界の壁を感じます。

「つまり、僕の話はタチバナと呼んでください。と言いたい訳です。皆にも言うけど、間違っても僕のことを『勇者』って呼ばないでね。あれ、ほんと嫌だから。僕としてはタチバナと呼んで貰いたいのので以後よろしく！」

なんとなくgbしてみた。

「さっきの『勇者』嫌い発言は、そんな清々しいしく公言するものではないのだが……。前にも言っていたが、そんなにタチバナは『勇者』になるのが嫌なのか？」

さっきの『勇者』嫌い発言してから、周りからの視線が前よりも少しどころじゃなく痛い。

この『勇者』は何故そんなに崇められているのかと疑問に思うのだが……。

やっぱり世界平和の為に魔王を倒したとか、世界の乱戦を未然に防いだとか、そんな肩書きでも持つてるのかね……。

しかし、姫を助け出すだけなら、『勇者』ではなくとも良いと思う。

『英雄』やら『救世主』と色々があると思っただが……。『勇者』はどうしても剣と魔法で戦い、魔王を倒すというビジョンしか浮かび上がってこない。

知識不足なのか……これは……。

「さっきから悩んでいる様だがどうした？」

「いや、ちょっと『勇者』の成り立ちについて自分なりに考えてました。それで質問なんですけど王様。王様の中での『勇者』って何ですか？」

「世界一の強者。世界を背負える器。魔を滅ぼす力。世を照らす一筋の光。人々の希望。ま、言えばきりが無いが、これだけは言える。勇者の全てが古代より『黒髪』であること」

理解はした。

でも嫌がらせだろそれ。

昔からそんな物伝えてくるな。

「本格的に帰りたくなってきました」

帰る場所無いけど。

「これも先人からの伝えた。諦める。どんな経緯があつたとしても、黒髪であり、我が娘を助けた辺りでタチバナには平穏な日々など来はせんのだから、諦めてルーミアの婿になれ」

ちらつとルーミアを見ると、脳処理が追い付いていないのか、顔が真っ赤の状態で全く動かない。

なんか、一部の者からは殺気を感じるのだが……こっちの身にもな
って貰いたい。

はっきり言って、胃に穴が空きそうです。

「婚約は同者同意しないと成り立たないから却下！」

僕は力強く言った。

ルーミアはどうか知らないが、こんな強制的な婚約認めて堪るか！

「ほお、ルーミア。お前はどうか？」

いつの間にやら冷静になっていたルーミア。

深呼吸して、自ら落ち着かせている。

たぶん全員の視線がそっちに行っただと思う。

「私はタチバナ様のこと愛してます……！！！」

「ブツ……！！！」

告白からぶっ飛んでプロポーズされちゃったよ！

ヤバイ死ぬ、胸が張り裂けるほどに僕は嬉しくて死んじゃう！こんな事なかったから……異性からの告白じゃなく、ぶっ飛んでプロポーズなんて……………。

ほんと……涙が出るほど嬉しいよ。

ルーミアはこちらに向かって抱き着いてきた。
しっかりと、身体を密着させ、お互いの鼓動が聞こえる程に……。
僕らはお互いを感じ合っている。

手を伸ばしたい……。
でもそれは、同時に答えでもあるから……。

「……ルーミア……」

声が震える。

同時に罪悪感で吐き気がする。

「タチバナ様、私は貴方を愛しています！これは、王が決めた事ではなく、私が決めた事です！だから聞きたいです……貴方の答えが！」

これは蜜の様に甘い言葉だ。

酔えればどんなに幸せな事か……。

僕とルーミアは見つめ合う。

ルーミアは思いを伝え顔が本当に真っ赤だ。リンゴの様に真っ赤で、可愛いと錯覚してしまう。

ルーミアは不安からか、瞳には涙が溢れる。

僕はそんなルーミアに同様してしまう。

ああ……。

……本当に好きなんだなと……。

「僕は……」

答えは最初から決まっている。

そう、転生する前から覚悟は出来ていたはずなのに……。

無意識の内か、拳を強く握り閉め、手からは少しばかり血が滲み出している。

汗ばむ拳から出る血は、本当に不快だった。

僕もルーミアが好きだ。

でも……。

「ゴメン……ルーミア。君の願いは叶えられない……」

決めてしまったのだ。

転生して何を成すのか。

ここでやめてしまうのは、自分を裏切る気がしてしまう。

僕は………。

『全ての不幸の女性を出来るだけ助けたい』

そう、願ってしまったのだから。

「そんな……」

ルーミアの身体が震え出す。

チュツ……。

ルーミアの額に僕はキスをした。

「えっ……」

不意の事に呆然となるルーミア。

「ほんとごめんね……。僕は我が儘だから……」

決心はついた。

「私は貴方をこんなにも慕っているのに……愛しているのに！どこがいけないのですか！私駄目な所とか直しますから……だから私から離れないでください……。お願いします……。おねがい、じまずから……」

まるで母に駄々をこねる子供の様だ。

「ごめんね……。でもルーミアは、これから国を引き継がなきゃいけないし、子孫も残していかないといけない。こんなブラブラ男より、もつと優秀でカッコイイ人と結ばれるのが、君の幸せだと思うから」

「わたしは……。私は、貴方以外の子供は作りたくないし、私には、貴方以外のカッコイイ人なんて存在しません。私の幸せを勝手に決めないでください！私はタチバナさんと居るだけで幸福なんです！切り替えりが早いな……。」

こんな感じで、僕への思いも切り替えしてもらいたい。

「じゃ……。試練だよ。この試練を乗り越えられたら生涯君を愛し続けるって誓おう」

「それ、本当ですか！！」

ルーミアの顔が、キスするー？まで近付いてきた。

「ほんとほんと」

「本当に本当に本当ですか！？」

さっきまで泣いていたのが嘘のような笑みで聞き返してきた。

「えへへ……。これで私達公式な夫婦になるんですね。」

「そうだね、なれば良いね……」

僕はルーミアの耳元に近付き、耳元に小さく囁いた。

「《忘却の記憶》」

辛いなら忘れてしまえばいい。

辛かったら最初からなかった事にすればいい。

忘れたくなければ抗えばいい。

なかった事にしたくなければ記憶を魂に刻み付ける。

「貴方は誰ですか？」

ルーミアは僕に聞く。

「通りすがりの自称正義の味方だよ」

笑顔で僕は答える。

「タチバナ……貴様いったい何をした!？」

王様が叫ぶ。

そりゃそうだ……。

だって無断で、娘の記憶消しちゃったんだもん……。

そりゃ怒る。

「ん?どうしたのですかそんなに大声出して。珍しいですね」

ルーミアは今の状況を理解出来ないのか、クエスチオンマークが頭上に現れそうだ。

「大丈夫ですよ王様。忘れたのは僕の事柄全部です……。大して日常生活に支障はでません。ただ……この数日の記憶が無いだけです。それに、僕はこの人の好意を受け入れられない」

他の人が不幸なのに、僕が幸福になるなんて許されない。

これは、僕が決めたルール。

「訳があるのか？そんな泣きそうな顔になりよって、説得力ないぞ」
少し考えていた事が顔に出てしまったのか、王様に悟られてしまった。

「理由はガキみたいなものですよ……僕は正義の味方になりたいんだ……。正義の味方といっても狭い範囲ですけどね」

拷問されるのを見ると、ほんとキレそうになるから僕は。

「じゃ、僕は行きますね」

そう言って此処を出ようとした。

「え？もう行くんですか！もう少しゆっくりしていけば良いのに」
この言葉に留められてしまった。

ポン……。

ついついルーミアの頭を撫でてしまった。

「／／／なんですか!？」

跳び上がり、距離を取った。

「ありがとう」

僕は満面の笑みでそう答えた。

「／／／／／」

そして、僕はこの城から出ていった。

「ぬお〜！〜ルーミア超可愛いよ！マジお嫁さんにしたかったよ！
調子の上で断らなきゃよかった。チクシヨウ〜！」

今絶賛後悔中だった。

第10話

「黙ってブーン！」

実際に黙っていないが、さっき命名『最強の魔導書（笑）』（手帳）の一覧に『フライ』と記入。

分かる人は分かると思うが、かの人気小説ゼ　の使い魔から少し拝借した。

結果いちいち言葉にするとというネックがある。

正直めんどくさいけど、ほら、なんか唱えたくならない？気分的な問題で？

まあ、本格的に面倒臭くなったら手帳一覧にある『重力制御』を使って飛ばばいいわけで。

しかし、この『最強の魔導書（笑）』は加える事は出来るのに削除する事出来ないんだよね。

そこが今の悩みどころ。

ページにも制限あるから無闇矢鱈むやみやたらと書き加えると、いずれ書けなくなってくるんだよね。

ページは計画的につてね。

「平和だね」

現在マツハの速度を出し飛行。

たまたま見かける村を訪ねたりし、近くに盗賊やら山賊やら居るか聞き込み調査中。

この頃平和の様で、モンスターの襲撃やら山賊や盗賊の強奪行為など大してないらしい。

ま、平和はなによりで。

「ネタで誰か弟子でも取ってみようかな……。
ハッ！それよりダンジョンでも作ってみようかな」

伝説地下666階とかイケるのでは……。

「造ってみようかな」

とりあえず適当に原っぱなどを見つけ、ダンジョンを制作する事に決めた。

「あれ、なんか最初考えていた事とは関係ない気がする」

最初のあの一件以来ほんと平和で、何処からも被害が出ていないよ
うだ。

平和は良いのだけど……暇です……。

ギルドとかで有名になるといった方法もあるが、ああゆうのは有名
になると後々大変になってくるから嫌。

なら平凡に暮らせば。

というのもあるが、それでは宝の持ち腐れである。

力があるのだから使いたいと思うでしょ、普通。

で、何故ダンジョン制作をしたいからかというと、一回やってみたかったんですダンジョンボス……。と、いつても僕はラスボスで最終階にいたいという設定にしたい。

だってほら製作者だし。

そんな事考えている内に地下666階のダンジョンが出来てしまった。

さすがです『破壊神^{ツルハシ}』

後はモンスターや宝箱の設置をしなければ。

勿論モンスターからはドロップ品が出る仕掛けで。

一階のモンスターはやっぱりスライムだよな。

苔地獄とかやったらさすがの伝説の勇者でも瞬殺だよな。

自重しなければ。

せつかく地下666階もあるのだから最終階はやっぱり悪魔にすべきか……。後で考えよう。

とりあず1階〜100階までのモンスターは色違いのスライムでいいか。

勿論の事このダンジョンからモンスターは出られない様にしておいた。

捕獲とかされたらたまったもんじゃないからね。

ドロップ品はさすがに消えないけど。

100階〜200階のモンスターは後で考えよう。

さすがに一日で攻略は無理でしょ……。

それより、ドロップ品を考えなければ。

スライムの色によってドロップ品も変えた方が良さそうか？

しかし、めんどくさい。

とりあえずこんなもんかな。

1 【ゲル状のなにか（スライムの破片）】 70%

2 【銅】 1%

3 【HPポーション】 1%

4 【壊れた天使】
1%未満

こんなもんかな……。

1 は地味な嫌がらせとしてなんとなく。

2 は売れば金になりそうな物を。

3は傷を癒す秘薬。

4は超プレミアムアイテム壊れた天使。
効果は死者を生き返らす。

何故こんな物を用意出来たかという。スキル『道具製作』のおかげだったりする。

なんでも造れる……なんつうチート……。

効果が効果だから血眼になってスライムを狩る姿を想像する。

なんか笑えます。

まあ、『壊れた天使』の入手確率は1%未満だから天文学的数字にするつもりです。

そんな簡単に入手出来たら死者がホイホイ蘇っちゃうよ。

まあ、ダンジョンで戦闘不能になったら懐から半分取って自宅まで蘇生させて送ろう。

自宅が無い場合は町の近くに放置で。
もちろん懐から半分頂いて蘇生させる。

なにこのドラ エ。

スライムも設置し終ったし、宝箱も置いといた。

後は人かな……………。

とりあえずチラシでも作って配分しとこうかな。

そして、僕は近くの首都？に向かって飛んで行った。

第11話

「号外！号外！近年に新しいダンジョンがなんか生えてきました！これは号外だ！号外だ！」

「あ、すみませんこれお願いします」

「あ、いえ、勧誘とかじゃなくて……」

結果、誰も貰ってくれませんでした。

周りからの視線が痛い。

最初はビラをばらまいていた、そしたらうるさいと警備の方から注意を受けた。

次はビラを大人しく、通る人に渡していく作戦を取ったが誰も取るうとはしなかった。

一部からは勧誘と間違えられたりもした。

なんか人生鬼ばかりです。

ビラがいけないのか……。

自分の作ったビラをよく見てみた。

『伝説 地下666階ダンジョンクエスト（クエスト関係ありません）』

後はひたすらスライムを描いた。

なんかよく見ると……スライムが多過ぎて、きしょいです。

仕方ないので裏側から順に貼っていくことにしました。

紙は印刷の様にコピーを取るので、かなり有り余っています。

目標は、壁全てに貼る事にしよう。

嫌がらせもこみで。

路地裏に到着。

最初は薄暗い路地裏に貼る事にした。

「1枚〜2枚〜3枚〜接着剤切れた〜!」

渋々、接着剤をスキルにより製作し作業を続けた。

「誰か助けてくれ!!」

どこからともなく男の助けを呼ぶ声が聞こえる。

「あゝ無理〜だって忙しいもん（棒読み）」

そう言って作業を続けようとした矢先、誰かが僕にぶつかった。

予想外（少し予想していたが）の展開に、手元にあったビラの数枚が空を飛んだ。

「渡り鳥よ！頑張つてね〜」

飛んで行くビラに手を振り、送り出した。
まだ見ぬ果てに。

「さて、次行きますかね〜」

少し崩れかかっているビラをしっかりと直し、次に行くことにする。

「待ってくれ！お願いだ助けてくれ！！」

「だが断る！！」

なんか面倒臭い事に巻き込まれそうなので、この場から早々に退場したいのだが男に足を捕まれ動けない。

「見つけたぞ！！」

叫んだ奴筆頭に、ぞろぞろと集まってきた。

数は大体10人程。

「お願いだ助けてくれ！！」

足元の男は泣き叫びながら僕に縋り付いて来る。

「おい、餓鬼。そいつをコッチに渡せ」

リーダー格の男がそう言った。

「どつぞ」

足元に居る男を差し出す。

「ヒイ！！助けてくれないのか！！」

「だってね、理由知らないし。」

追われている理由が殺人とかだったら目もあてられないし、だから僕は何も出来ない訳。お分かり？」

助けた相手がもし殺人犯だったら、間違いなく他からは共犯と間違えられるよ。

「頭、適当に女掻っ払って来ましたぜ」

その中、一人と四足になって鎖で首輪をされている少女が居た。

痛々しい。

薄い布一枚に生氣のない瞳。

どれだけ絶望を味わってきたか容易に想像がつく。

「ほらワンと鳴け！」

しかし、鳴かない。

「この馬鹿犬が!!」

脇腹を蹴ろうとした瞬間。

その脚自体が無くなった。

だつて……。

僕の右手にあるんだもん。

「グア!!!!!!」

鮮血が飛び散る。

彼女に当たるのは好ましくないのでコツチに寄せておいた。

「覚悟は良いか……?ま、聞いてもどうせ答えは変わらないけどな」

パチン!

刹那。

11人の姿はこの場から消えた。

「この子はどうしようか……。」

精神の方はずたぼろだろいし、心のケアした方が良いよな」

とりあえずダンジョンに戻るとするかな。

「助けていただきありがとうございます!」

足元に居たコイツの事完璧忘れてた。

「僕はこの子と一緒に帰るけど……君にこれを託す」
ピラ数100枚を手渡しした。

「はい？」

「感謝は言葉より行動で表そう。
と偉い人は言いました。よろしく！」

そう言って僕はこの子供を抱え空に飛んだ。

第12話

今現在、ダンジョン最下層666階にラスボスの部屋らしき物を作り、少女の看病をしている。
歳は9才ぐらいだと思う。

「ハア…ハア…ハア…！」

第三者視点から見れば非常に危ない人に見えるだろう。
僕は荒息を立て、興奮している。
少女に対し欲情していると間違えられそうだ。

(どどどど、どっしよう?!)

相手幼女といえ二人っきりの空間は色々と死ぬる。

看病といっても、今幼女は寝てるので寝顔を見ることがぐらいしか出来ない。

することないなら着替えさせろって？

無茶言っな！

ただえさえ女性は苦手なんだ！

あの柔らかい肌に触れながら衣服を脱がせていく。

考えただけで口から吐血しそうです。

「克服したと思ったのにな……。再発症するの早くね？」

何か食事を作るのも良いけど、目を離れた隙にいなくなりそうで、心配で心配で仕方ない。

しかし、いずれは食べるのだ。
用意しなければ……。

しかし、物凄く心配で中々動けない。

（もし起きて、自分に絶望して舌を噛み切ったらどうする！？
寝返りして運悪く落ち、後頭部に直撃して死んだらどうする！？
もし、まず有り得ないが、誰かがここ来て誘拐し……肉便に……。
鬱だ死のう……）

しかし、マジどうしよう（号泣）

変わり身でも立てるか？

立てなきゃ動けないし……仕方ない……。

今製作中の中でも最高クラスのデーモンを見張りに付けよう。

パチン！

魔法陣から人型のデーモンを1体呼び出した。

「主人なんでしょうか？」

中性的な顔付きに、すらりと伸びる背筋。

秀気的に今日からコイツをセバスチャンと名付けよう。

「セバスチャン、僕が離れている間この子の見張り頼むよ。
もし、もしなにかあったら……セバスチャン……スライムの餌にするからね……」

「上々理解しました。お任せ下さい」

僕は食事を用意するため、近くの首都まで買い出しに行った。

<Side冒険者A>

俺の役職は戦士。

まだまだギルドでの日も浅く、初心者というやつだ。

この頃最近になって、新しいダンジョンが出来たと聞いたので、興味本意でそこまで行くことになった。

「なあ、此処だよな？」

どこで入手したか分からないピラを元に、どうにかしてたどり着いた。

「そうですね……。この地図が間違っていなければ正しいはずですよ」
コイツは俺と一緒に組んでいる魔法使いだ。

とりあえず周りを探索していると一つ扉が見つかった。

「これだよな？」

「これですね」

扉に手を掛け、引くが扉は開かない。
押すが扉は開かない。

「なあ、開かないんだけど？」

引いても押しても反応が無い扉を指差し、魔法使いに聞いた。

「故障でしょうか？」

「いや、俺に聞かないで」

「ちよっとすいません」

俺を退かし、魔法使いは扉の近くに行くのと突然考えだした。

「横ですね」

そう言って扉を横に引くと、全く動かなかった扉が開き始めた。

「ナイス！」

「どうも」

俺を先頭に中に入っていた。

「なあ、このダンジョンってスライムしか居ないんだよね？」

「はい、ビラによるとそう書いてありますね。他の階は開発中の様ですが」

スライムといえばモンスターの中でも最弱と呼ばれている種族だ。

実は俺、ギルドに入る前からウルフ族ぐらいなら狩れる实力があるのだ。

今更スライムなんて怖くもなんともない。

それに、今回は魔法使いも居るのだ。余裕だな。

「おや？スライムが一匹このラインの中からコチヲを狙ってますね」

足元を確認すると赤い線が綺麗に引かれていた。

どうやらスライムはこのラインから外に出る事が出来ないようだ。

「行くぜ！」

「了解！」

そして俺達はラインの中に入っていた。

しかし、これが間違えだったとは知らなかった。

ラインに入った瞬間、俺達の身体はスライムに喰われた。

そう、数万を越える数のスライムが一斉に襲い掛かって来たのだ。

声を上げることも出来ず、俺達は地下1階でスライムにやられた。

……畜生……。

それが俺の最後の言葉だった。

第13話

「ただいま」

「お帰りなさいませマスター」

内心感動。

なんか良いよね、言った言葉が返ってくるのは。

「まだ、起きないの？」

少女の寝顔を覗き込んだ。

最初の頃よりも安らかな表情で安心した。

「脈は正常……」。

呼吸も安定しているし、いずれ目を覚ますね。

目が覚めて、お腹空いたじゃ可哀相だから、いつ起きても良いように作っておかないと」

僕は亜空間から食材を取り出し、調理にかかった。

他人のために、僕が手料理を振る舞うなんて人生初かもしれない。

せめてゲテモノ料理に成らないように気をつけなければ。

なんか今嬉しいかもしれない。

<Side少女>

私は要らない子だ。

家族に見捨てられ、奴隷商人に買われた。

そして、そんな境遇は私だけじゃなかった。

皆が売られていくなか私は誰の目にも留まらず、まるで置物の様な扱いを受けていた。

これはある意味で幸せかもしれない。

売られる子の大多数は買われた者によって人として死ぬ。

そんなのに比べ、私は誰の目にも留まらず、ある意味綺麗なまま私
で有りつづける事が出来た。

私の髪は血のような色をしており、瞳は真つ黒。

そして何より特徴的なのは、背中に刻まれたルーン文字。

これは私が産まれた頃から在ったもので、詳細はよく分かっていないらしい。

忌ま忌ましいルーン文字。

9才の誕生日の日にそれは起きた。

誕生日の在ったその次の日に、家族は私に該当する記憶だけ、すっぽりと無くなっていたのだ。

「貴女だれ？」

元母親に言われた。

「迷子かい？」

元父親に言われた。

家族に私は忘れ去られた。

私は泣いた。

涙が枯れるまで泣き続けた。

何故こうなってしまったんだと葛藤した。

きっとこれは、私の後ろに有るルーン文字が原因なんだと思った。

私はルーン文字を消すため、湖に入り、洗い取ろうとした。
爪で背中を引っ掻いても、やはり落ちない。

それもそうだ、これは私が産まれるのと同じ時に生まれたもので、私とは切っても切れない一心同体の存在なのだから。

そんな事は分かっている……分かってはいるけど……！

気がつくと、日は暮れ夜になっていた。

「帰ろう……。」

……ってどこに私は帰るんだろう……」

家に帰ろうにも足取りが重い。

家に帰ろうにも私を受け入れてくれるかが心配だ。

けど私は信じたかった、家族の絆というものを。

決して私は歩き出した。

夜の森は不気味だ。

なんの準備もせず、夜に森の奥深くに入り込むと帰ってこれなくなると、よく母親と父親が言っていた。

私はその言い付けを守っていた。

今日までは……。

ほのかな死臭に、焦げ臭いなにかの臭いが鼻につく。

着くと町は燃えていた。

ただ一人の生存者を残して。

私はこの光景に絶望した。

「うう〜……、お母さん、お父さん……。
なんで私を忘れて死んじゃうの……。
一人は嫌だ……一人は嫌だよ〜！」

私は泣き叫んだ。

町を覆い尽くしていた火は消え、月の光が私に差し込む。

これは私は本当に『捨てられた』んだ。

お母さんに……

お父さんに……

フラフラした足取りで、燃え尽きてしまった村に向かった。

向かう途中、私の後頭部になにか鈍器で殴られたような強い衝撃が走る。

そして私は意識を失った。

だが私が最後に薄笑いしたロープのおじさんを見た気がする。

それから起こる事は全部記憶になかった。

それは何故か……。

それは私とその出来事を全て拒絶していたからだと思う。

受け入れてしまえば、私が私ではなくなるから。

だから、私は忘れる。

でも、今回は特別に忘れる事なく記憶に刻み付けた。

私は誰かの腕の中に抱えられて、空を飛ぶような浮遊感を感じる。

久しぶりに人の暖かさを感じる事が出来た。

いつもみたいな不快な気分じゃなく、本当に気持ち良かった。

あまりの気持ち良さに私はまた眠りについてしまった。

「ここは何処？」

目を覚ます。

知らない天井に心地良いベッドの感触。

「ここは地下666階のワンルームでございます」

声のする方を向くと色白い青年が立っていた。
ご丁寧に場所も教えてくれた。

しかし、地下666階ってなんだろう？

新しく出来たダンジョンかなにかだろうか？

「貴方が私を助けてくれたの？」

「あ、いえ、私ではありませんよ」

「じゃあ誰が……？」

「出来たよ……ハッ!!」

黒髪の人が皿を両手で運んで、私を見て驚いていた。

「起きたんだ！良かったね！」

「貴方が私を助けてくれた人なの？」

「お、YES！」

あ、お腹空いたでしょ？

これ美味しくないかもしれないけど、栄養はしっかり有るから食べてみて」

私は空腹のためすぐさま飛びついた。

「美味しい……」

「フツフツ……。空腹は最高の調味料ってね。」

どんな物でも空腹の時に食べれば、美味しく感じるからね。例え僕みたいなへボが作っても美味しく感じる……」

「そんな事ない!!」

「え……？そんなに死ぬほどまずかった？空腹でもまずかった？ちよつと首吊ってくる……」

「違う!!そういう意味じゃなくて、もっと自分に自信を持つ欲しいんだよ!!」

「ありがとう……。なんか照れるなノノノけど、残念だ……」。

君の精神の方は安定したみたいだし、僕のケアは要らないね……。お金は渡すから安心してくれていいよ。無銭で放り出すなんて事しないから」

そう言って笑顔になる黒髪さん。

しかし、その笑顔が今では憎らしかった。

「私はここにいちやいけないんですか……?」

声が震える。

瞳には涙が溜まり、今にも溢れ出そうだ。

「え?」

黒髪さんは驚いた顔をした。

迷惑だろうか……。

それでも私は……。

私は此処に居たい。

せめて恩返しはしたい、とそう思う。

「お願いします私を此処に置いて下さい!」

私は頭を下げた。

「あ、ああ……。

とりあえず頭上げて。年下に敬語を使われるのは少し違和感あるかな。まあいいや。

僕の名前は橘辰子。橘って呼んでね。

そう呼んでくれるなら、仕事は有るけど此処に置いておくよ」

「はい! タチバナさん!」

「元気が良いね。」

そこに居るのはセバスチャンっていつて、執事だよ」

「セバスチャンでございます」

「とりあえず今日は疲れたでしょ？」

今日は休んで明日話しをしよう。

後……この頃最近の子供の服装が分からなかったから、大量に買ったけど良い？」

「！！ありがとう！」

今気がついたけど、私の服装は絹服一枚。

殆ど裸同然であった。

「後はそのセバスチャンにでも聞いて。

僕はちょっとダンジョンの調整に行くってくるから」

そう言って行ってしまった。

感謝してもしきれない、私にまた灯を入れてくれた人。

私は貴方の為に頑張っつていこうと思います。

そういえば、まだ私の名前教えていなかった。

そして私の新たな生活が幕を開ける。

第14話

ハッキリ言います。

「なにこれ」

一階の構造が凄く拡張されているにも関わらず、入口付近だけにスライムが集まっています。

見渡す限りのスライムスライムスライムスライム……。

何かうごめいてのがやっと判るぐらいだった。

ずっと見てると気分が悪くなってくる。。

数は約10万いるかないだと思いたい。

あくまで『思いたい』だ。

スライムとは分裂して繁殖する種族で『栄養』さえあれば、雄雌関係なく殖え続ける。

このダンジョンは造り始めて間もない。

そのせいか、スライムの『栄養』となる養分がそこらかしこに床や壁に付着している。

僕の造ったスライムは壁や床にある『苔』を養分とし、己の活動力とするのだ。

更に厄介な事に、スライムが餓死して死ぬと、周りに養分を撒き散らしながら死ぬようなので、床や壁などの『苔』がまた繁殖し始める。

以下ループ。

特に変化が無ければスライムの数は変動しない筈なのだが、誰かがここに来てスライムの餌食になったようで、さっきから地味にスライムの数が殖えている。

このダンジョンの中で死んだ方は蘇生してる筈だから大丈夫だよなうん。

スライムの群れは伝説の勇者の真っ青な光景だと思う。

入った瞬間バットエンドになるのは必然。

質よりも数を学ぶ、このダンジョン。

嫌すぎる……。

更に死者が出れば出るほど、スライムが殖えていく。
例えスライムがやられても、1体でもスライムが残っていれば周りの養分を吸い取りつつ、増殖。

また、規定値に戻る訳だ。

スライム最強伝説。

まさか環境を整えると、ここまでスライムが強くなるとは知らなかった。

「僕は取り返しのつかない事をしてしまった……」

実行してから後悔するのが、もはやデフォになっている気がする。

「とりあえず、スライムは1階〜100階の間に均等に別けておこう。」

そうすればバランスも良くなるし、冒険者も死にずらくなるでしょう…… たぶん……」

最初に入った冒険者の方、すみません。

ダンジョン難易度、最初からぶっ飛んでました。

もし会ったら、何かプレゼントしてあげようと思う。

あの光景を見てもなお、挑戦する勇気があればの話しだけ。

「あ、宝箱設置するの忘れてた……」

第15話

とりあえず、色々と予期せぬ事が起こったり、肝心な宝箱用意するの忘れていたり散々だったりした。

しかし、宝箱の中身を未だ決めてないってどうゆうことよ、僕。

各階に宝箱置くのは決定事項だとして。

でも、ただ置くだけってのもつまらないよね。

近くにトラップでも仕掛けるか？ファンタジー的な意味で。

「宝箱の中身どうしようか……。」

ポーシオンはどうだろか？

しかし、傷を負って手にしたのがポーシオンだと絆創膏並の虚しさを感しないか？」

運動会とかで、怪我したりして優勝賞品が絆創膏一年分ぐらいの虚しさを感ずる気がする。

頑張ったのに優勝賞品が絆創膏って……。

マジで役員を蹴り倒したくなってくるよな。

まあ、それはさておき。

「現金……？いや、生々しいな。

なら、装備品か……。いや、サイズが合わなかったりしたら色々可

哀相だ。これはとりあえず保留で。

それなら装飾品かな……？指輪とか腕輪とか首輪とか……。さすがに首輪は問題あるからないな。

なら手始めに、色々と効果付属の付いている装飾品でも造ってみようかな」

宝箱の中身である装飾品は、今日中にも造るとして今すぐに出来る訳じゃないから、ダンジョンをちょっと閉めた方が良いかな？

さすがにモンスターの落とすドロップ品だけというのも味気無いし、宝箱あつてのダンジョンだと僕は思う。

外に看板でも立てておくか。

そうと決まれば、ちょっと工房に引きこもって作業しようと思はる。僕は思う。

……あ……。

そういえばあの娘の名前聞いてなかったなあ。

工房寄るついでに聞きに行こう。

名前を聞くのがついでって、人間としてどうだろ。

僕の社交性は0ですか。

はい、そうです。

自覚はしてるよ自覚は……。
ただ直そうとしないだけで。

「《ワープ》！」

これは、このダンジョンのマスターのみが発動可能な始動キーの内
の一つ。

このダンジョン内ならばどこでも移動可能の優れもの。

「君の名前は？」

「わ！脅かさないでよ……」

突然現れればそりゃ誰でも驚くか……。
して、今着てる服は、あの中にネタとしてこっそり入れておいた『
セーラー服』ではないか！

「水兵か……良い趣味してるじゃかいか。

それと君の名前まだ聞いてないから聞きに来たよ」

セーラー服がメインで名前がオマケって、相手に目茶苦茶喧嘩売ってるよね？

「私の名前はリリアナ・カーストっていうよ、よろしく！」

そう言うとりリアナ僕に向かって走り出してきた。

リリアナは9才。

本来は親に甘えたい歳なのだ。

ただもう親は存在しないため、橘辰子に甘えたいだけである。

この歳になれば多少なりとも人を疑ったり怪しむもののだが、あの助け出した事件（？）以来リリアナは橘にとても感謝している。その御蔭かりリアナは橘を無条で信じている。

しかしそのなか実に空気が読めない奴が此処にいた。

（いきなり新手の暗殺拳か……？

幼女が襲い掛かって来るなんて、嬉しいような悲しいような……。だがあえて受け止めよう！）

「さあ！バッチ来い！

グへへへッ！！」

目茶苦茶欲望が剥き出しになっており、その表情100人中51人がドン引きするようなユルユルの表情であった。

親が我が子を迎えるような、そんなほのぼのではなく、とても危ない情景を表している。

無邪気に走り出す子。

欲望剥き出しの男。

犯罪者かよお前……。

そう言われても仕方ない状況を作り出している。

パフ！

リリアナは僕を抱きしめると顔を胸に押し付け、ニコニコしながらハアハアし始めた。

ハッ……？

少し冷静になるんだ僕。

リリアナが僕の胸に顔押し付けながらハアハアしてるのは分かった。

そつえば、僕もこの部屋に入ってから感情が高ぶっている気がする。

勿論的な意味で。

さっきから、リリアナが僕の胸でハアハアしていたせいか、なんか

服にゆだれがこびり付き、生地から肌まで浸透し始めてきた。

生地を通して直接肌に感じるリリアナの体液（唾液）は心地よいものであり、僕の鼓動が早まる。

まさかこれは僕達が欲情しあっているのか？

あの間になにがあった。

セバスチャンは何をやっている！

そういえばセバスチャンは？

「ミスりましたね。まさかこの部屋にサキュバスの『淫薬』が充満するとは……いやはや私の失敗ですね」

そこには何食わぬ顔して何かポーズ取っているセバスチャンが居た。

「ね？しよ……？」

リリアナはそう顔を上げ頬を真っ赤に染め上げて言った。

僕は……。

「《完全浄化》」

このエリアに満ち溢れた『淫薬』の香りは見事に消え、リリアナは顔を真っ青にしたのち真っ赤にして僕を突き飛ばし、どこかに飛び出してしまった。

「セバスチャン後でしばく……」

「返せる言葉もありません……」

まだ、この辺り周辺には何もしてないから安全だと思っけど……。でも本当に『何も』してないからこそ逆に危ない。

捜さなければ……。

僕はこの部屋から出て、リリアナを捜す事

第16話

しかし、何も無い地下ダンジョンほど寂しい物はない。

1階～100階の間以外殆ど手を加えていないため、通路がただ規則的に続いているだけである。

「しかし、手間が掛かる子だね……。」

ま、このダンジョンに関してはマスターである僕が探せない場所などありはしない。

という事で《サーチ》&《ワープ》

まず、このダンジョン全体をサーチして、リアナの気配を辿り移動する。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「いや、なんかこっちがごめん……。」

見つけたかと思った瞬間、リアナ唐突に謝りだした。

「ほんと？私を捨てない……？」

こちらの顔を伺う

ようにしているせいか、身長差により自然と上目使いになる。

それは、ほんとに9才かと思うほどの破壊力を秘めていた。

「／／／どちらかというと僕のせいだったりするから、リリアナは悪くないよ。」

それと、捨てたりなんてしないから安心していいよ。

まあ、離れたかったら離れていいから。

それはリリアナ次第だよ。」

頭を撫で、抱きしめた。

「／／／うん！頑張る！」

リリアナは顔を真っ赤にしながら、僕の胸に顔を埋めた。

「で？なんで僕がリリアナを捨てると思ったの？」

逃げるのは／／／なんとなく分かる気がするが、そこで何故リリアナを捨てるのに繋がるか、よく分からなかった。

「／／／だってタチバナを突き飛ばしちゃったし、機嫌を損ねて捨てられると思ったから……」

「いや、僕そんなに心狭くないから。子供は少しぐらい反抗的な方がいいよ。」

でも、従順な方が僕は好みかな……」

なんとというか、ツンデレも良いけど、僕にはそこまでの忍耐力が無いから、途中で僕がツンデレ特性1の言葉攻めで沈んだりする可能性が大だ。

ということ、ツンツンしてる性格の人はあまりは好みじゃありません。

せん、精神的に脆いんだよ……僕は……。

父さんの下着と私の下着一緒に洗わないで！臭いが移るでしょ臭いが！

とか。

私の視界内半径2メートル以内に入らないで！

とか。

反抗期は必要だと思うけど、大人になるにつれドンドンとエスカレートするなら要らないと思う。

て、いつの間にかリリアナを娘と見ている僕は色々と末期なようだ……。

自重しろ僕。

「うん！頑張る！」

リリアナはそう言った

「頑張つてね」

何を頑張るかまでは聞かないけど。

「ねえねえ、なんでこんなダンジョンの地下に住んでるの？外に出ればもつと人がいて賑やかだと思うよ？」

「あえて言うなら此処が僕の家だからかな……。

それに僕は賑やかな場所より、こつやって静かに過ごしている方が性に合うんだよ。

リリアナはもつと賑やかな所が好きなのかな？」

「タチバナが嫌なら別にいい！」

リリアナ向日葵のような満面の笑みを僕に向け、ギュッと僕の裾を掴んで離さないようにして擦り寄ってきた。

「はあ……。」

リリアナがそれで良いなら、それでいいか……」

僕は工房まで空間を直接結び、僕の工房から必要な物を取り寄せた。

本来ならば自分専用の亜空間（僕専用倉庫）に物を詰めて、そこから取り出すのが一番楽なのだが、未だ完全に亜空間を把握仕切れなかったので、入れることが出来るが出す事が出来ないなんとも不安定な倉庫になってしまっている。

出し入れが出来ない倉庫なんてあっても使えない。

という事で、最初から座標を固定したうえ僕の空間と繋げるという方法を思い付いたので試してみると、良い感じに出来た。

やはり、認識しづらい亜空間よりも通常空間の方が認識しやすいようだ。

しかし、あくまで緊急用の倉庫なので、早く亜空間能力を完全に扱えるように修業したいと思う。

「はいこれ」

僕は倉庫（工房）からブレスレットとオリハル性の指輪を引っ張り、リリアナに渡した。

「うわ〜！凄く綺麗！これはなに？」

どうやら僕が渡したブレスレットとオリハル性の指輪を気に入ったようで、手に取りじっくりと鑑賞している。

造った方から言うと褒められるので悪い気はしなかったが、よく美術の成績1の僕がここまできめ細かに出来たのか不思議だ。

まあ、それも此処に来ての補正ということで納得しておいた。

「これは、このダンジョンのモンスターに襲われない為の物で、ブレスレットは見方識別の信号を出して、指輪はある一定レベルのモンスターに命令を下せるように造った物だよ。」

でも、このブレスレットと指輪はダンジョンの外に出ると効力を失いたただの装飾品になっちゃうから気をつけてね」

といっても、本当にリリアナが危険になったら勝手に再起動してくれるし安全だと信じよう。

「／／うん！ありがとう！」

そう言うとりリアナは、ブレスレットを右腕に付け、指輪を左手の人差し指に付けた。

「／／似合うかな……？」

頬を真っ赤に染め、どこか不安気な様子で僕に聞く。

「似合うよ」

僕はただ一言簡潔に述べた。

「ありがとう！／＼／＼／」

そうリリアナは言つと僕に抱き着いてきた。

少し気恥ずかしいが、最初の目的であるリリアナは捕獲したし、あの事件の原因であるセバスチャンと O H A N A S I しないと いけないので戻る事にした。

「／＼／ん、じゃ、戻るよ」

「うん！！」

そして僕らは光の粒子に包まれた。

第17話

< Side 冒険者 A >

俺の役職は戦士。

今さっき新しいダンジョンに入り、入った瞬間スライムの大群に襲われ、なにも出来ずに喰われたハズだったのに、気がついたら取っ
ておいた宿屋のベッドの上で寝ていた。

俺達は夢でも見たのだろうか？

しかし、スライムに捕食されるあの生々しい感触がリアルすぎる。

クシャ……。。

ポケットから紙が掠れる音が聞こえたので、ポケットから紙を出した。

『伝説 地下666階ダンジョンクエスト（クエスト関係ありません）』

と、なんともふざけてるビラがあった。

後はスライムが……。

このビラの大量のスライムの絵を見てあの光景を思い出す。

ゾクッ！

背筋に冷や汗を垂らした。

あのスライムに喰われる忌ま忌ましい感触を思い出す。
身体の一部一部が溶かされ、筋肉組織が喰われていくあの感触を。

夢じゃなかった。

隣に寝息を発てて寝ている魔法使いが居たので、起きたら少し聞いてみる事にする。

しかし、いつの間に宿屋に移動したんだろうか？

素朴の疑問にちょっと宿屋の店主に聞くことにした。

「お？起きたか。

驚いたぞ、宿屋の入口に倒れやがっついていて。

もし店に変な噂が立ったらどうしてくれるんだ。」

そこには40才過ぎぐらいのオッサンが居た。

「なあ、店主。

俺達ダンジョンに行った筈なんだが、何故俺達が宿屋の前に倒れてたんだ？」

「はあ……俺が知るわけねえだろ！

夢でも見てたんじゃねえのか？

ダンジョンに行ったら今頃モンスターの胃の中だろうか……」

確かにそうだろう。

しかし、感覚的に分かる。

俺は確かに喰われた。

しかし、それなら誰が俺らを此処まで運んだらうか？

そして、あそこまで喰われ掛かっていた俺達を誰が治療してくれたのだろうか？

考えれば考えるだけ出てくる。

「おい大丈夫か？」

突然店主に声を掛けられた。

「今日はもう夜だ。寝てその混乱してる頭でも整理させておけ」

どうやら、外は既に夜のようで、周りには明かりが灯っている。

俺達がダンジョンに向かったのが昼過ぎあたりだから、あれから数時間経っている事になる。

あの傷を数時間で……？

考えていると知恵熱が出てきたので、今日は休むことにした。

いつか、俺達を助け出してくれた人に御礼をしたいと思います。

「ハクシヨン!!!」

我ながら見事までのクシャミだったと思う。
もしかしたら、誰かがどこかで僕の噂をしてたのかもしれない。

「大丈夫？タチバナ」

僕の巨大なクシャミに嫌な顔せず、むしろ僕の心配をしてくれているようだ。

「リリアナは優しいね。」

さて……セバスチャン覚悟は出来てるよね？」

フッフッフ……とうしてやるっか……。

その日ダンジョンからは悲痛な叫びが鳴り響いた。

「だけど……それが良い！」

同時にセバスチャンがMに目覚めた（号泣）

第18話

僕は工房で今現在、宝箱の中身を造るのに奮闘中。
アイテムが造れるまでダンジョンの立入を禁止した。

「さて、どうしたもんか……」

ここは1番ポピュラーな属性軽減系の装飾品でも作るか。

意外に属性軽減系アイテムってこの世界には余り無いみたいなので、
もしかして需要とか付くのか？

結果的に出来上がった物は僕の完全オリジナルで、火、風、水、土、
雷、光、闇、そして何故か最後に重力。
属性軽減能力持ち、90%カット。

一撃で消しカスになる魔法攻撃でも、火に直接触れたぐらいのダメ
ージしか通さないだろう。

オーバーキルを遥かに越えた攻撃ならさすがに死ぬ、流石に魔法を
完全に遮断しているわけじゃないからな。

そうだな、例えばドラゴンクラスの奴を一撃で倒すぐらいの攻撃な
ら一撃で死ねかもね。

更にこれはあくまで『属性軽減』であるからなんの属性も持たない
魔法なら通るし、さつき造った物以外の属性は軽減してくれない。

「まだ、試作段階だけど……まあ、形にはしておこう」

属性軽減能力を持つ宝石と、9個のくぼみのある腕輪を何個か作った。

腕輪に何故9個のくぼみがあるかというと、宝石を入れられるようにと考え、腕輪に宝石を詰める楽しさと……なんとなく。

そして新の力を発揮させるネタとしてなんとなくかっこよさそうな気がするからなのだ！

この腕輪は、全てのくぼみが塞がると、『オートガード』『魔力増幅』『収納機能』と地味に約に立つ能力が解禁される。

『オートガード』は攻撃魔法に対し、自動で防御魔法が働き攻撃を防ぐ。

『魔力増加』はその所持する魔力の2倍を与える。

『収納機能』は亜空間などを使用するのではなく、決まった場所に保管、そこから取り出す。

僕はまだ亜空間が不完全だから制御できず、これが今の僕の限界である。

しかし、造った属性軽減の宝石の数は8個。

これでは完全に埋まらない。後1つに関しては後々造ろうと思う。今はちょっとアイデアが浮かばないので、保留ということだ。

僕はダンジョン各地に宝箱を設置するため、各階を巡り、良い場所

はないものかと詮索中。
それとは別に、後で他の階の改装工事もしなければならぬので色々大変である。

……まあ、『破壊神^{スルハン}』に任せるから楽で良いけど。

勿論、宝箱の近くには陰湿な罠を山ほど仕掛けさせてもらった。

例えば、扉を開くとスライムがなだれ込んだり。

ピッキングしようとして、鍵穴を覗き込むと鍵穴から非殺傷の毒針が射出されて目が目茶苦茶痛かったり。

宝箱がスカだったり。

宝箱の中の魔物と戦ったり。

……でも大丈夫だよね冒険者だし……。

エクスプローラって優秀だし……TRPGの話しだけだね。

さて、リリアナについてなのだが、残念なことに未だ役職が決まっていない。

別になにもやらなくても良いし、居るだけで構わないのだが……立場的に重苦しい気がして、途中で泣き出さないと心配になる。

沈黙の威圧って。

……なにそれ怖い……。

魔物の世話係にでも任命しようかな……。

いや、いかんだろ！

ビジュアル的にも無理だろ、スライムとはスライムとはスライムとは……。

拘束、触手、R指定。

いや！指輪とブレスレットあるし大丈夫かな……。

想像……して脳内シャットダウンまでわずか3秒。

悪い方向にしか想像出来ません。

やはり、リリアナと魔物の接触は控えるべきだろう。

……特にスライムは……。

ドラ エのスライムは可愛いから良いけど、エロゲのスライムはリアルティ―溢れる……あばあばあば！！

落ち着け……落ち着くのだ。

煩惱退散 煩惱退散

落ち着けた気がした。

さて、101階〜200階の改装工事を終わったことだろうし、魔物を造りにかかりますかね。

スライムの次といえはなにがある？

こんな時こそギルドのモンスター図鑑を見るべきでは？

確かギルドのモンスター図鑑はギルドカード持ってないといけないんだっけ？

はあ……。

セバスチャンに留守番任せて、ちょっと町まで行くしかないか……。

リリアナは心配だけどセバスチャン居るから大丈夫でしょ。

とりあえず、1階〜100階まで解禁しておきますかね。

スライムも居るし、宝箱も設置したから、冒険者も文句は言わないだろう。

（セバスチャン、ちょっと町までモンスターに関しての出掛ける用件があるからリリアナのこと任せたよ）

(御意)

これはパスというものを通じて会話をすることができ、距離関係なくいつ何処でも話せる優れもの。

これさえあれば、いざという時に連絡も取れるし、リアルタイムで情報供給も出来る。

外に出るのは少し不安だが、連絡手段があるので少し安心して外に出ることが出来る。

久々の青空を仰ぎ見た。

「目がツツツ!!!」

お日様の陽射しに目が痛かったり。

うん。今度から定期的に外に出よう。

そう僕は心に決めた。

第19話

町の人波を見て、これが都会か……とちよつとばかり感傷に浸っている。

と、そんな事考えるよりギルド探さない。

あまりコミュニケーションが得意ではない僕である、片っ端から聞いて回るにも結構の勇気が要る。

常に心臓バクバクの状態で体に悪い。

強気でいられるのは正しいことをしていると確信している時のみで、基本僕は小心者であり、人に道を聞くのも戸惑うヘタレである。

あまり他人に迷惑は掛けたくないと思うあまりコミュニケーション能力が欠落している。

その内、これも克服したいと切に願う。

とりあえずお金を得る為、今持っている宝石を換金してくれる装飾店に向かった。

宝石の原石をどうやって入手したかというと、ダンジョン製作のさいに掘っていたら勝手に見つかった。

やはりというべきか、どの世界も宝石の類は結構の値が張るため収入に困らない。

中には魔力を内包している原石も発見したので適当に売っぱらった
ら一番高かった。

今のところ、この世界のお金を使ったのはリリアナに料理を出すた
め食材を買った時ぐらいである。

お金の単位は。

白貨1枚、金貨100枚分

金貨1枚、銀貨100枚分

銀貨1枚、銅貨100枚分

銅貨

である。

これはこの世界共通らしく、貨幣は硬貨を用いて経済を成り立たせ
ている。

だが、僕が居たあの世界のように1000円札というお金が紙とい
う概念はない。

「おお〜！また来たのか宝石少年」

そこにはナイススマイルのナイスガイが人懐っこうな笑顔をして陽
気に笑っていた。

「なんですかその名前？」

「ん〜いや〜、君から買った宝石純度が高くてな、欲しい欲しいと
周りから散々言われてよ……。」

そのせいで家の宝石が全然売れなくてな……。あ、けど宝石少年の

宝石のおかげですっかり稼がせて貰ってるぜ！」

「そりゃ良かったですね。」

じゃ、また生活費の足しにするためオッサンこれ買い取ってほしい」

「ほほお、また随分とでかい塊を持ってきてるじゃねえか。」

よくまあ、こんなの見つけてくるな。

なあどこで見つけてきてんだ？」

「企業秘密って言うてるでしょ……。まあ、とりあえずミスリル鉱とルビー原石、後色々あるから買い取ってくれませんか？」

「はあ……。俺は良いけどな、そんだけ持ってりゃ自営業も出来るだろうに」

「面倒臭い、人付き合いが苦手、そして女性の方からの熱い視線が辛い。」

しまいには吐血するぞこのやろう！」

僕の叫びにオッサンは愛想笑いしながら若干引いている

さっきからこっちの方を凝視してくる人が多く、大体は女性なのだが、一部男性もあり僕に向けて殺意をびしびしと飛ばしている。

黒髪はやはり珍しいのか人々の目線を集めてしまつらしい。

チラホラと通り過ぎ際にコッチを見ている人が多い。

「旦那はモテて良いな……」

「黒髪が珍しいだけでしょ？別に面が良いわけじゃないしモテたこ

ともない。

こんな餓鬼に誰も寄ってこようなんて思う人なんていませんよ」

「自虐精神旺盛だな、オイオイ」

「あ、そうだついでにギルドの場所教えてくれませんか？」

「……まあいいさ、ちょっと待ってる。

あったあった、ほれ、この地域周辺の地図だ。持ってけ」

「ありがとうございます」

「別に構わないさ、どうせ銅貨10枚で買えるんだ。

いつも世話になってるしこれぐらい軽い軽い。

これから家をよろしく。

浮気はしないでくれよ……？」

どこか店主の不安そうな顔に僕は噴いた。

なんというか、ごっつい顔して小動物ぽくなるギャップに耐え切れなかった。

あの不意打ちはちょっと反則だろう。

そのせいか、何人かの人は笑うのを堪えているのが分かる。

「……まあギルドで何するか知らんが頑張れ」

笑われたのがしゃくなのか突然無表情で周りに威圧を掛けている。

それを感じ取ったのか笑いは声は消え、バラバラと人が散っていった。

「……助かりました。ではこれお願いします」

そう言うと僕はさっきからずっと持っている袋を店主に渡した。

店主はニコニコしながらも僕の渡した袋を開け、中身を物色し始めた。

「……これなら金貨3枚だな」

金貨3枚を出すと、物と引き換えに僕に差し出した。

「毎度あり」

金貨3枚を普通の財布に入れて、スリに気をつけながらギルドに向かい歩き始めた。

しかし、さっきからの熱い視線がまだ消えていなく、さっきからついて来ている。

ストーカーですかこのやろっ！

いかんいかん、女性には紳士的。女性には紳士的。フウ…フウ…ハア

……。
以上刷り込み完了。

「あの〜私のために死んでください」

そして僕が後ろを振り返ろうとした瞬間、背中をナイフで一刺し、中には毒が入っていたのか視界がクラクラと視点が定まらないず治療しようにも手足共々口すら開けない。

僕はなす術もなく力尽き財布を引ったくられ、犯人の少女は家族と一緒に笑いながら食卓を囲む普通の家族の光景が映し出されていた。

B A T T E N D 1 金銭を目的とした少女の殺害。

と脳内でそんな光景を幻視した。

「（嫌だあああ！！）」

起こるかもしれない最悪の事態を予想し、B A D E N D にならないようにならないように細心の注意を払う。

これが唯一僕に与えられたスキル（？）『妄想危険探知』そのおかげか交通事件（通り魔）に一件しか合ったことしかないし、結構大事なスキルなのだと思う。

「（うん、声を掛けられたら後ろを振り向かず走って逃げよう）」

「あの〜」

（キターー！！）（・・・）

僕は振り返ることなくギルドまでD A S Hした。

ダッシュじゃなくてDASHというところが肝心です。
もう疾風のように走り去りましたよこの場から。

え？勘違いだつて？お前の被害妄想だつて？

ハッ！！これぐらい常識として周りのクラスの子から言われ続けてきましたよ。

痛くも痒くもない！

……なんてことありませんけどね……。

僕の心はピュアなんです。触れたら砕ける脆いガラスなんです。だから追っかけてこないでっ！！

「待つてください！！私の話しを聞いてください！！！」

可笑しい可笑しい可笑しいよ。人外級の速度について来るなんて……なにあの子？

しかし、分かったことがあるとすれば、余計捕まりたくないということだけだ！！

人混みの中を走り抜けるなんて、なんか人弾幕シューティングみたいだ。

「《加速》 《加速》 《加速》！」

魔法の複数掛けにより更に僕は速くなる。

後ろの標的はいつの間にかロストしていた。

流石にこの速度には追いつけないか……。

周りを見渡しから標的が居ないか確認し、地図の通りギルドに向かった。

第20話

回れ回れ俺達

.....。

.....なにがしたいんだる僕。

今、喫茶店的な憩いな場所でモンスター図鑑を開いてちょっと中身を確認していた。

なんといいいますか.....待ちきれなかったとです。

家に帰る前に、買った物を電車の中とかで見たり、待ち時間とかよく見るでしょ？（決して暇潰しじゃありません）

あれと同じでいち早く確認したかったのだ。

「さてさて、この世界にはどんなモンスターが居るか楽しみだな.....」

中を開くと、まず目に入ってきたのはスライムだった。

ああ、やっぱり、ドラ エミたいな可愛いスライムなんていないんだなあと改めて思った。

これに載っているスライムは、僕が造りだしたスライムとやはり酷似していた。

『スライム』

危険度

弱点 火

生息地 どこにでも居る。

剥ぎ取り部分 無い。あえていうならゲル？（ 使い道無し）

特性 火に極端に弱く、松明の火で倒せる。

物理攻撃には多少ながら強い。

繁殖能力はモンスターの中1番であるが、その代わり知的行動をしない。

スライムは動いている物ならなんでも食べる。

足は遅いので、余程状況が悪くなければ走って逃げられる。

……と見出しは中々であった。

次。

『ゴブリン』

危険度

弱点 頭部

生息地 平原や山脈と色々な場所に生息。

剥ぎ取り部分 頭部に生えている角。

特性 集団行動が多く、物理抵抗もなければ魔法抵抗もない。

知的行動はしなく、攻撃は単純なので一体一体相手にすれば勝てる。武器はこん棒などを持っているが、これは大した殺傷能力をもたない。

洞窟などに巣を張る。

ちょっと飛ばして次。

『オーク』

危険度

弱点 動きが遅い。

発生場所 人が居る場所なら基本どこでもいる。

剥ぎ取り部分 目玉、爪、牙などなど。

特性 集団行動が多い。

物理抵抗も魔法抵抗もあり、中々倒しづらい。

矢では通らないその皮膚は中級魔法でもないかぎり通さない。
繁殖行動以外に知的行動は起こさず、罨に落とし穴掘って、中に落
とし、火を焼ければ倒せる。
力は強く、攻撃の一撃を受ければまず死ぬ。
オークに雌は確認できず、オークらは、どうやら異族との交尾で種
を増やしているとの報告。

(嫌な予感するんだけど……)

オークの特性の異族交尾は人も入っているのではと心配になってき
たのだ。

(後で確認にでも行くかな……)

『グール』

危険度

弱点 火、光、足元、聖水。

生息地 死骸の多い場所。

剥ぎ取り部分 死者を敬え。

特性 集団行動が多い？(発生する環境にもよるので不特定)

物理抵抗も魔法抵抗は不明。たが火や光は必ず弱点に当て嵌まる。

(聖水は一部効かないものもいる)

グールは基本的に足が遅く、第三欲求の『食』に忠実になる。グー
ルの攻撃特性は種によって異なるが最終的に『食』に直結する。

若い固体(死にたて)は足も速く、死にたてのためか性欲も残って

いるようだ。グールの一番厄介なところは、種族など関係なく条件を満たすと、どの種族もグール化することが出来ることである。グールは頭を潰さぬかぎり動き続ける。

余談

更に厄介なのが『幻想種』がグール化すること。確率が低いがあるということ。

1000年くらい昔、ドラゴンがグール化したということがあったらしく、世界中が障気に塗れ、一時期大変なことがあった。幸いそのグール化したドラゴンは『ロード』クラスに葬られたとのこと。

(ロード?)

少し気になり、モンスター図鑑の目次あたりをよく見ると『ロード』という項目を発見したので、そのページを見てみることにした。

『スライムのロードまたは『原初の化け物』』

危険度

弱点 不明

生息地 不明

剥ぎ取り部分 不明

特性 物理攻撃完全無効化。普通のスライムとは違い知能も知識も保有している。

姿は人の姿をしているらしく、素手で殴るとドラゴンクラスは跡形

もなくなる。外見がとも人間に似てるため初見ではスライムとは分らない。

なお出現場所は不明。だが、出現条件は世界のスライムがある一定までいなくなると自動出現する。

そして、スライムがまた増えはじめると姿を消す。

騎士団副長が兵を率いて一度戦い赴いたが、圧倒的な力の前に副長は生死の境を漂った。

ロードクラスが出た場合、戦わず逃げましょう。

(ふう〜、ロードクラスね……)

僕はぱたりと本を閉じると、本を返しにギルドに向かっていった。

「モンスター図鑑ありがとうね」

待ち受けの人に本を返し、それと一緒にマカライト鉱石の入った袋を渡した。

「こりゃなんだ……」

あの喧嘩のせいが最初よりも腰が低い気がする……いや……微妙に怒ってらっしゃる。

「あれ〜怒ってますか？」

心当たりといえばギルドの倒壊率が増えたことぐらいしか……。

「お前さんの一撃のせいであいつが死にかけたんだ……!!」

語尾になにか強いものを感じる。

「ああ、ドンソンさんのことですか？」

あれはそつちの自業自得でしょ？

友の死が怖いなら戦わせなきゃいい……覚悟がないなら逃げればいいよ……」

しかし、あのときはカツとなってオーバーキルの『神竜』を使ったのは僕も悪かったかなあ、と少し反省している。

「この袋の中身の鉱物はいつたいなんだ？」

受け付けの人は袋の中を見ながら手を伸ばし、不思議そうな顔をしてマカライト鉱石をしげしげと眺める。

「いや、実は僕も知らない」

「おい」

「冗談冗談。マカライトっていうよ」

「ふうーん。聞いたことない鉱物だな、どんな特徴があるんだ？」

「知らない」

「おい……」

マカライトっていったらMH的なものと、不思議なア　スのヴォーパルソードぐらいしか知らないよ！

「ごめんね知識が浅くて！」

「そこはプロの力ということだ」

「俺は加治屋じゃねえよ……」

「ま、これはタダであげるから」

それだけ言うと僕はギルドから元気よく出ていった。

「さて……」

右腕に魔力を籠めるとモンスター図鑑と全く同じ本が出てきた。

「構造把握のち模写……術者のイメージがあやふやでもコピー出来るこの能力便利だな」

今僕が使った能力は、モンスター図鑑に『アイテム欄』が構造把握を行いデータを保存する。

別にモンスター図鑑をイメージする必要はなく、イメージするのはあくまで『アイテム欄』……あのゲームとかである『アレ』です。モンスター図鑑に構造把握を行いコピー、データとして保存すると『アイテム欄』に追加されるといいう仕組みです。後は『アイテム欄』をイメージするとアイテムの一覧が出るので頭の中で指定するとそのデータに元ずき僕の魔力で復元されるといったものである。

構造把握したのは僕ではなく『アイテム欄』であり、僕は未だ中身を確認しきれていない。

なら全部コピーして『アイテム欄』に送ればいいのでは？ という

のもあるけど倉庫は倉庫で使える。どちらかというとなら倉庫の方がアイテム欄より展開が遙かに早い。

アイテム欄はアイテム欄をイメージしてそこから選ぶ。といった微妙にめんどくさい作業が要るからである。

倉庫は欲しい物を直接イメージで送るのでアイテム欄よりも早い速度で出すことが出来る。

そして、アイテム欄には致命的な欠点がある。

「耐久性がなさすぎる……」

少し凶鑑のページを破ると魔力となって大気に霧散した。

アイテムはあくまで『使う』ことしか出来ないということを実感した。

使いづらい……。

後で改良などしなければならぬと心底僕は思った。

「ふう……」

現実には中々上手くいかないものだ。

「リリアナにお土産買っていかないか……」

思考を切り替え、リリアナになにを持って帰るかを考えるけど中々思い付かない。

「僕の知ってる少女が好きそうな物といたら……なんだろうね……」

…」

考えたがやはり思い付かなかった。

「あの……」

なにか聞こえるが気のせい気のせい。

僕に声かけたわけじゃないでしょ、常識的に考えて。それよりもリリアナの土産どうしよう。

「あの……」

セバスチャンにもお土産買って行ってあげるかな……。

「あの……！」

耳元で女性らしき人の声が聞こえたけど、僕に声かけたわけじゃないでしょ。

たぶん僕じゃない違う人に声かけてるんだよね？

「その黒髪黒目の怪しい人！

私を無視しないでください！」

黒髪黒目……珍しい人もいるもんだな、それにさっきからこの人を無視しっぱなしってこの人が可哀相じゃないか。

とりあえず店を周ってアドバイス受けながらにしようかな……でもあまり人とは話したくないしどうしたものか……。

さつきから無視されている可哀相な人の声ができる方を見てみると、

「あ、やっと気付いてくれた!」

さて、動くかな……。

僕はそのままその女性の人の横を通り過ぎて行くこととするけど、誰かに肩を掴まれた。

ピキーン!!

「ゴフツ!!」

肩から伝わるなにかに僕は思わず吐血してしまった。

「だ、大丈夫?!」

僕と目を合わせたその人は髪が赤く目が黒かった。服はよく居る町民A的な質素な服を着ている。

そして、両腕で僕の肩を掴みながら心配そうな顔をしているが、

「まず、肩を離してください……」

女性による接触は内臓に負担をかける……。

「あ、うん……」

女性は僕に言われて肩から手を離し、心配そうに見ているがあまりジロジロ見ないでもらいたい。再度吐血しそう……。

口元に付着した血を裾で拭い、口元を綺麗にしておいた。

「で、なにか用があるんですよね？」

「あ、うん。」

なんか困って顔してたからどうしたのかなあ〜と思って声を掛けたんだけど、気付いてるのか気付いてるのか私を無視するんだもん！だからわざわざ、あなたの特徴を言ってまでしたのに反応がないんだもん。

酷いよねひどいよねヒドイよね！」

さっきから呼び掛けてたの僕だったんだ……この女性とは無関係だから呼び掛けられる筈ないと思ってたのに意外だ……。

「貴方とはどこかで会ったことありましたっけ？」

「ないですね」

「では失礼」

「ちょっと待った！」

ちよつと待ったで足を進めるのを止め、振り返った先にはニッコリ笑顔の女性がいた。

「お姉さんに相談してみなさい」

関わりたくない人と関わってしまった。

……不幸だ……。

第21話

「いえいえ、困っていませんし気になさらないでください」

相談に乗ってくれるというが、はっきりいって僕は女の人と二人つきりなんて状況は口から血が吐き出るほど苦手だ。

無理にでも断ろうとすると、何故か女の方は泣きそうな顔になった。

「すみません……私なんて屑ですよね……吐血するくらい触れるの嫌なんだもんね……調子に乗ってごめんなさい」

ヒソヒソ

周りからの視線が急に痛くなってきた。

え？悪い僕なのか？

「じゃ……」

すぐさまこの場から消え去りたかったので、駆け足で街の外に出ていった。

「あ、お土産買ってきてなかった……」

しかし、あの街に戻るほどの度胸は僕にはないのでほとぼりが冷めるまで行くきはない。

「ダンジョンに戻る……」

僕はフライで空に上がり、ダンジョン目指して進んでいった。もとい、帰っていった。

（セバスチャン聞こえる？）

（はい）

（僕がダンジョンから離れてる間になにか変化はあった？）

（はい。13人ほどの探索者がダンジョンに侵入してきました、今50階にて足止めを食らっているみたいです）

（50階になにか足止めするような罠とかモンスターとかいたっけ？）

（いえ、なんかダンジョンの中に突然変異したスライムが生まれたみたいなので、たぶんそれに苦戦してるんだと思います）

突然変異のスライムね……スライムが多少なりとも性質が変わっただけで、そんなに苦労するようなものなのか？

（うん分かったよ。ちょっと自分で調査するから、セバスチャンはリアナの近くにおいてあげてね）

（御意）

「《ワープ》」

50階に向けてワープした。

「ずいぶんスライムも倒されたみたいだな……」

周りを見渡すと、スライムの残骸であるゼリー状の物体が、そこらかしこにばらまかれてあった。

「スライムも数が揃わなければただのザコか……」

耳を澄ませば、遠くから爆発音やら剣撃音が聞こえてくる。

「じゃ、行きますか」

しばらく歩くと、ただっ広い所に出た。

「これが突然変異のスライムか……」

視界に入ったのは、戦士系5人魔法使い系5人僧侶系3人が次から次へ湧き出てくるスライムを即座に潰している。

あれ？シーフは？

まあ、いいか……。

「苗木？」

中心に苗木らしきなにかが生えており、そこからスライムが湧き出ているようだ。

「調度いい！ その人手助けして貰えませんか？」

僧侶らしい男の人がそう言った。

「了解」

僕は苗木のスライムにたいして跳躍。

「お前誰だよ!?!」

「一時協力してくれる……」

「橘辰子。橘とでもよんでくれ。『ディスファケン』ランサーシリ
ーズ」

手からいきなり槍が現れて、周りの人は驚いているが、そんなこと
気にせず槍を苗木に突き立てた。

形は一度崩れるが、飛び散ったゲルがうごめき苗木に集まっていく。
更に苗木の体からはスライムが飛び出て僕に襲い掛かってくる。

パン！

襲い掛かってきたスライムを空いている手で殴ったら、弾け飛んだ。

キモッ！！

中々終わりそうにないので、てっとりばやい方法で……的確に核を
打ち抜かせてもらう！！

「《ゲイ・ボルグ》！！」

核が破壊されてたらこれで終わり。核が『無かったら』無駄なこと
したと思って諦めるよ。

うねウネ

ああ〜やっぱ『核』なかったか。このタイプのスライムって核ない
もんね普通。

一度後ろに下がり槍を消した。

「聞きたいことあるが……何故己の武器を消した……」

歴戦の戦士臭のする中年オッサンが隣に並んで僕に話しかけた。

「僕の一番の武器は『体術』ですから！」

決して『格闘技』じゃないので勘違いしないでもらいたい。全体的
な動きが得意なだけなんです。はい。

「……足手まといにはならないでくれよ……」

「もちろんです」

バチバチ……！！

なんか気分的に手元をスパーク！
カツコイイよね、これ！

他のメンツは真剣に命を懸けて戦っていますが、僕は別に命なんて懸けてない。

だって、これただの『処理』だしね。

それに、この方達も死にはしないからね……。

ん、まさかこの『スクエア』に寄生してる？

このスライムは死ぬと地面や壁に『養分』を撒き散らす特性がある。

つまり、このスクエアに寄生する。

スクエアから養分を回収 養分でスライムを生成 スライムはやられ、死ぬのと同時に地面や壁に養分を撒き散らす 以下ループ。

最悪のループパターンだった。

普通に戦ってたら一生終わらないね。

仕方ない……。

僕は地面に手をつき、誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。

「対象スクエア初期化開始」

すると、苗木からスライムの出現が止まり、萎れていきました。

「ふっ……全くなんだっただ……」

仲間のうちの一人がそう言うと、前衛を務めていた戦士達はスライ

ムの死骸からドロップ品を回収に行きました。

出るわ出るわ……。

彼らはゲル状のなにかをスルーして……。

『銅』 12個

『HP』ポーション 4個

を回収した。いったい何体スライム倒したのやら……。

「あれだけ倒したのにシヨボ……」

すみませんね。しょぼくて。

「ねえ、この瓶に詰まった液体何かしら？」

女性の方がポーション片手に疑問を浮かべていました。

「スライムの中身じゃね」

「嫌なこと言わないでよ……誰かこれ飲んでみない？」

場が沈黙した。

「だって嫌じゃん。モンスターから何故か出てきた怪しい瓶だよ。誰かそんなもん飲むか!!」

背の小さい陽気な女の子が叫んだ。

「でも、苦勞して手に入れた物だし……もったいないわよ？ っと
いうことで誰か飲みなさい」

結局誰も飲みたがらなかった……グスン……。

「じゃあ、多数決で決めましょ」

皆頷き、多数決が始まった。

「じゃ、ユリウスがいいと思う人手を挙げて」

一人を除いて手を挙げた。

あ、僕は空気なので数には含まれていません。

「これは虐めか!!?」

「」「」「まあ諦めろ」「」「」

「安心しなさいユリウス。こっちは毒、呪いが解呪出来るエキス
パートの僧侶がいるから！」

「」「お任せください!」「」

そう言うとユリウスさんの自由を奪い、ポーションを飲ませ始めま
した。

「ガッ……! ガバガバッ!」

無理矢理飲まされて気絶状態になり、泡を噴いて倒れてしまった。

ガバツ!!

「殺す気か!!」

「流石悪運だけが取り柄のユリウス殿だ」

ふほほほっ、と笑ったのは魔法使いの内の一人の老人だった。

「あれ?さっきまでの疲れが抜けた……?」

「どうやら、あの瓶は体力回復をしてくれるみたいだの」

「ん?」

ユリウスはある一部が活動していることに疑問を感じ、ズボンの中を覗いた。

「イ ポが治ってる……!!」

瞬間、女性陣による蹴りがユリウスに炸裂した。

「もう最低!!」

「セクハラです……」

「間違っても女性がいる時に言うセリフじゃないわね……」

「はははははっ!!」

良かったなユリウス。不能が治って!!」

「俺はこの時ほど神に感謝したことはない!!」

拳を天に突き上げたその姿は、なんだか輝いていたと思います。

「さて、僕は帰りますね」

そう言って去ろうとした僕の肩に、ユリウスさんの手が僕を止めた。

「お前がいたおかげで、俺のイン が治った。ありがとうな……」

なんか嫌だな……なんだが僕がユリウスさんの ンポを治すために来たみたいで嫌だ……。

「いえいえ、僕はなにもしてませんよ」

「でも、俺は夕チバナに感謝したいんだ!」

ん〜。そうだ!

「ならこれを受け取って貰えませんか?」

僕は倉庫に空間を繋ぎ、何も無い空間からまがまがしい剣が姿を現した。

「これを使いこなしてください」

「なんだこの不吉なオーラを纏った剣は……」

「掴んでみてください」

そう僕が言つとユリウスさんは魔剣『マトリックス』の柄を掴んだ。

「なんだこれは……力が沸いてくる!」

「お礼というなら、その魔剣を使いこなしてください」

「ああ、ありがとな!」

そして、僕はワープしてリアナのところに帰っていった。

試作型の魔剣を扱う人がいてよかった。

あの魔剣は刃の部分に穴が空いていて、そこにとある宝石を埋め込むと……。

ほんと人生楽しくなってきたよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302m/>

盗賊嫌いのチート君

2010年10月11日22時08分発行